



PAPER  
RADIO

猫神様



GODDESS  
BASTET



DJ  
NAGATA

# 『猫神様が憑いている』

## 【目次】

■ Stranger

■ 僕はロボット

■ 言葉バラバラ

■ いつも心に神様を

「はいまいど、ながたでございます。

本日はペイパー・レイディオ『ネバーエンディング・ホリデー』イン・コミックマーケット8 8 スペシャルにようこそお越しくださいました。なんとつてスペシャルですからね、特別ゲストをお迎えしてお届けします。それでは早速ご紹介しましょう、音楽と踊り、愛と豊穣のネコ女神、ミズ・バステト・フローム・イージップト！ はい拍手ーッ！」

「ティグリース」

「ユーフラテス！ え、チグリリス・ユーフラテスつてイラクとかあつちの方じゃ無かったです？」

「細かいことはいいのよアラスカもハワイも全部アメリカでしょ？」

「エジプト王朝まだ対外派兵の夢見てるんですか。もうアントニウスの時に懲りたでしょう」

「あれは相手が悪かった。カエサルの人教育があんなに効いてたとは思わなかった。フツーそうじゃない？ 現役將軍の方が強いと思うわよねえ！」

「それを骨抜きにしたのはあなたとこの……いやまあ、ともかく、神様にわざわざ遠くまでお越しただきたいみたいです。この暑い中」

「いえいえ、これもお仕事ですから。しかし暑いですねホントに二ホンは噂通り。しかもこのな  
んですかこの会場の熱気」

「まさに真夏の昼の夢ですよ。」

さて、今日はバツ様にお越しいただきましたからには」

「ちよつと待つてその略し方おばあちゃんみたい。神様だからって氣い遣わなくていいわよ、フ  
ランク永井に行きましょ」

「あそうですかそれは大変失礼しました。」

えーバツちゃんにお越しいただき」

「わざとか。カジュアルに呼びかけるなら『名を呼ぶも恐れ多くて躊躇われる我が美しく氣高く  
尊き女神』とかね」

「『元プリンス』みたいですね」

「じゃバツキー。投げるわよ。村山と二枚看板で投げ続ける」

「バステト様にお越しいただきましたからには、ここはぜひひとつ、『創作の秘訣』みたいなもの  
をリスナーの皆様とワタクシに披露していただけるとありがたいかなーと。収録会場ちようど  
コミケ会場ですし、みんなきつと興味津々です」

「あーそうですね。何から話そうかな……」

「あ、話のキツカケにわたくし去年の秋にこういう小冊子を作りまして」

「おー『作文メモ』。どれどれ……

……ふんふんなるほど、『なにを描くか』のテーマからアプローチしたわけですね。これはこれでおもしろいです」

「ありがとうございます」

「これはこれでいいのですが、でもわたしたちのような昔から生きてるものとしては、この近代西洋的アプローチ、物事の裏側に『本質』なるものがあると決めつけてかかる考え方はなかなか馴染みにくいものでして」

「こないだ龍樹さんがゲストに來られた時も同じツツコミを入れました」

「ま彼も旧い地球人ですからね。わたし彼ほど頭良くないので戲論寂滅とかよくわかんないんですけど、まあぶっちゃけ詩にしろ音楽にしろ劇にしろですね、

『おもしろければ勝ち、つまんなければ負け』

なんですこれね」

「まったくおっしゃるとおりです」

「理屈綺麗に通つててもライブ会場出たお客さんが満足で恍惚とした表情してないとこれシンガーとしては敗北でございます」

「まさに」

「ということで理論は好きな人におまかせしまして、わたしは実際になにか創作する時の心構

えみたいなどころをお話しようかなあ……そんなんでいいです?」

「いいですいいです、もちろん」

「はい、では。えー結論から申しますと、

『ころに『Stranger』をひとり持つ』

とそんな感じで」

「おつ、これはなにか深そうなお言葉いただきましたよ? ストレンジャー。異邦人?」

「順番追ってご説明しますね。ちよつと長くなりますけど。

えーまず最初の最初、創作の基本はなんと言いましても、

『俺の話を聞け』

です」

「そのとおりですね」

「魂打ち震わす最初の駆動力、『これを伝えたい!』てなことが無ければですね、創作なんかや

りようがないわけですね」

「そうですね。でもそれはあまりに当然のことで」

「そうでしょうか。四千年前のエジプトから現代のニホンまでそうだと思いますが、『詩人にな

りたい』という人は居るんです。これはダメ」

「あ、『詩を書きたい』ですね」

「そうそうそうそう。こないだユーミンと松浦亜弥の対談を読みましてね」

「バステト様細かいところまで目が行き届きますね」

「二応神様ですから。ユーミン好きですよ。『守ってあげたい』とか息子によく歌ってます」

「えっ、お子様いらつしやいましたっけ」

「なんか時期や地域によってそういうキャラ設定になってる時代とかあるみたいでもう自分でも設定表よくわかってないんですけど、あ、今日はネコミ美少女一四さいとかにしといた方がいいのかしら」

「その線で行きましょう」

「はによーん。バッキーたんだお？ はによーん」

「神様のタイムスケールから言うとな尾崎紀世彦と平井堅が兄弟のように思われているのかもしれませんが、二〇一五年にそれはキツイなあ」

「なにおう。『ジョジョ』第三部に『寄生獣』に『うしおとら』、二〇年も三〇年も前の作品がアニメになつて喜んでるくせに！ 『CCさくら』だっていつ新作出るかわからんだろが」

「『ドラゴンボール』まで新しいのやる有り様ですからね……ファンの高齢化問題はどこも深刻ですねえ」

「ま現実問題としてコンテンツに金払う習慣あるのが団塊ジュニアが最後なんじゃないの？ まあそれはおいといて。歌の話になつてアヤヤが『今度は作詞にも挑戦したいんです！』と言

いましたらユーミンがピシャリ、

『あーダメダメ、詞つてのは、書く人はもう書いてる』

と

「さすがユーミン」

「ユーミンですよ。これが前提です。天下国家を論じなくても、ほんの小さなことでもいいんです、『きょうのコーヒー、美味しく淹れられたな』とか、『電車で見たあの娘、可愛かったなあ……』とか」

「そうですねえ」

「ですからわたしこの『作文メモ』パラパラ見させていただいて、テーマは問題にするのがちょっと変と言いますか、書きたいものあるんだからそれ書くんだろ、その書きたいものについてどうのこうの言ったつてしょうがないじゃん、とは思いました」

「うう、痛いところを……」

「はい、それが第一段階。」

で次の段階は読者でも聴衆でも観衆でも、

『相手に聞いてもらう』

ということですね。ここを意識するのが第二段階。ここで初めて、『表現にこだわる』という行動が生まれるわけです」

「なるほど、『俺の歌』ならボエーボワー好きにかなればいいんですもんね、一人カラオケみたいに」

「そうです。もちろんそれでいいんですけどね。素直だし、本人も気分いいし。ただもう一歩先に進もうと思ったたら、

『もつと届けたい』

という欲を持つ。これこそが、腕を磨く直接のエンジンになるわけです」

「なるほど。思い出しますね、私も若い頃はウケが悪いと『なぜこれがわからない』と読者や観衆のせいにしたもんです」

「まあ実際そういうこともよくあることなんですけどね」

「神様でもありますか」

「何言ってるんですかありますよだいたい歌はね、しかも女の歌手ですとね、けーつきよくルックスなんですよアフロディーテのカマトトがエエ年こいてフリルいっぱいいた服で出てくるとそれだけで盛り上がる。わたしいつもこのなりでしょう。このズボンと筒みたいな、おかんのムームーみたいな」

「ドレス着はつたらよろしやんか。フリフリでもラメラメでも」

「地元が許してくれへんのでね……演歌歌手は着物着やなあきませんでしよう？」  
「砂漠の民も厳しいんですねえ。」

しかし、ここで悩みが生じますね」

「そうなの。人間独りで生きてりや苦悩なんてさほど無いんですよ。だいたい悩み苦しみ身悶えの八割九割が人間関係ですわ。伝えたいのに伝わらない、これは表現が悪いんじゃないか、わたしの技術が才能が足りないんじゃないか、もうダメだ引退する、あるいはバラエティに出るママタレになる」

「ママタレも今過当競争ですよね」

「結局どこ行っても同じなの。大雑把に言えば創作ってコミュニケーションなので。コミュニケーションが上手くいかない、少なくとも思ったようなイメージでいかない、ということは、何をやっても苦悩の種が尽きない、つてことなのです」

「勉強になります」

「はい。で、この苦悩をもう少し分析しますと、要はつまり

『これでいいか悪いかわからない』

ということなのね」

「あーわかります、この表現でいいか、こっちのがいいか、『推敲』の故事の頃から我々ライターはいつも悩んでおります」

「そうね。そしてそれこそが創作の醍醐味、楽しさだ、というのももちろんそうなんだけど、あまり度を越してくると、足を引っ張る。」

だいたいわたし、四千年五千年、アーティスト見させてきていただいておりますけれども、だいたいこう、途中で挫折されるのはここが多いですね」

「いわゆる『批判能力が創作能力を上回る』というヤツですか」

「事実を記すだけなら、

『今日は晴れ』

でいいわけですが、これをなんとか上手く伝えたいと頑張るあまりに、

『ああ太陽が僕の太陽が黒部の太陽が石原裕次郎が西から登って東に沈むーアツ・たいへん』」

「『これでーいいのかー』

良くないですね」

「良くないんです。なぜ良くないかというと、読者を考えすぎているんですね。自分だけなら

『今日は晴れ』で良いものを」

「ふむふむ」

「ここがわたしの睨むところ、創作家たちの行き詰まり煮詰まりの主因です。だからここをなんとかしたいと」

「あの、ここでちよつとズレてるかもしれない話をしていいですか」

「はいどうぞ」

「僕は以前から『人間は判断したくない生き物だ』という説を唱えていました」

「貴方それ好きよね」

「はい。最近は僕だけがそうなのかもしれないと思ったりもするんですけど、まあとにかく、脳使いたくないんですよ、エネルギー喰うから。」

しかし創作なんて判断の連続です。

これがいいか悪いかを延々と選択し続けている。

これがしんどい。

ここを軽やかにできれば、判断しなくて済むとまではいかなくても負担を軽くすることができれば、これは福音です。

たとえば……何か基準を導入する、とか」

「ええまさにそこ、貴方の言うその『基準』というところに、第三段階がある、と思うのです、わたしは」

「ついにきましたね」

「それが『Stranger』。

つまりですね、『わたし』と『あなた』仮に文芸作品としますと、『作者』と『読者』、そこに『第三者』を導入するわけです。

貴方の先ほどの言葉で言えば、基準をもたらせてくれる人、あるいは基準そのもの」

「んー、でもそれは、僕でも少しはやってますよ。一度書いた文章を推敲する時は、『著者ながた』から『編集者ながた』にスイッチして、厳しい目でチェックしてる、つまり、です。もちろん完璧にはできてないかもしれませんが」

「ええ。あるいはアメリカのショービズでよくあるのが、エンタティナーがプロデュースを兼ねるケースね。クリント・イーストウッドしかり、マイケル・ジャクソンしかり。

己を客観視することで、演者としての自分により厳しいハードルを課す」

「そうですね。それとは何が違うんです？」

「『自分』じゃダメなのよ」

「はー。

……は？」

「ここがね、ポイントなんです。

この考え方を導入すると、おおよその人が『自分』を幽体離脱させて上から俯瞰する、とか、先ほどのように役職を変えて視点を変えるとか、そのように考えがちなんです、それでは不徹底なの。

ここでもはやStranger、ぜんぜん違う第三者になる。

少なくともなろうとする。

宇宙人でもいいし、我々みたいな神様でもいいし、五歳の甥っ子姪っ子もいいですね」

「はー」

「貴方がたのエース、ハルキ・ムラカミはこれを『うなぎ』と表現してたわよ。こないだ読んだ柴田元幸のインタビュー本に書いてあった」

「えー、うなぎ！ うなぎかあ……うなぎ？」

「そのぐらい『違う者』でないとダメということね。さすがは超人ハルキ」

「うーん……ちよつとショッキングですね。なんか虚を突かれたというか、逆転の発想というか……またちよつと違う話していいですか」

「どうぞ。神様はヒマだから」

「僕は以前、科学的方法論と神秘的認識をこう、統一できないもんかな、なんて超分不相応な野望をいだいたことがあります」

「工業高校の一年生が核融合にチャレンジするようなものね」

「まったくお恥ずかしい。」

結構長い間ウンウン考えてたんですけど、両者水と油といえますかなかなかくつつかないんです。詳細は私のwebページ見ていただくとまさに思考の死屍累々という感じで」

「中世のアルケミストたちを観るようね」

「ええように言うていただいて泣けてきます。」

ところがある時全然違う方向から興味をもった安富歩という思想家が、実はこれの答えを既に

出しててですね」

「それは？」

「『わかるどころとわからないところを切り分けるのが、知るという行為だ』

科学的方法論で話を通る領域はそれでいけばいいし、ただそれが通用しない領域も広大無限に広がっていて、そこにそれを無理に当てはめることはただしい。これが『合理的な神秘主義』」

「なるほどね」

「ここの接続の仕方が、聞いてしまえばこれ以上ありえないほどあたりまえのことなのに、なぜこんなシンブルなことにいつまでもいつまでも気がつかないのだらう、と」

「そんなものよ。大事な発明ほど気づかないものなの。人間は馬に乗り始めてから鎧を開発するまで千数百年掛かってますからね。早く教えたくてほんとウズウズしたわ」

「教えてくれればいいじゃないですか。なんか騎士とか騎手とかの夢枕にでも立つて」

「乗馬は担当外だもの。うるさいのよ人の領域侵すと。やれ『なにかあつた時に責任がとれない』とか」

「縦割りですねえ」

「神様いっぱい居ますからね、それぞれに役割持たせないと食いつぶれ出ますんで」  
「そんな感じで今の話、『あつそういやそうだな』と思いました。」

第三者はなるべく関係のない方が、いいですね。実際のたとえば、戦争状態の二カ国の停戦監視をするには、まったく関係のない国のチームが出て行った方がいいですもんね」

「夫婦が揉めたら大家さんが仲裁に入るわけです。そうするとより公平が望める。完璧ではないにせよ。」

もちろん、結局『自分』でしかないわけだから完全に『自分ではない』わけではないんだけど、『作者』と『読者』の脇に『第三者』を置いて二等辺三角形を構成する。これで煮詰まりはだいぶ防げます。作者と読者の板挟みに悩んだから、第三者に裁定を仰ぐ」

「……だいたい『どっちでもいいんじゃないのー』って言われそうですね」

「そうなのよ。そしてそれがほしい正解」

「はー。確かにそういう第三者を考えれば、より公正な……ではないな、えーより『その場ではより有効度の高い』とかそんな感じかな、最高でも最良でも無いけど最適というか、そういう選択がサクサクできそうですね」

「ベストでもブライトテストでもなくジャストって感じね。英語嫌いだからよく知らないけど」

「自分寄りになりすぎるとナルシズム臭が強くなつて嫌な感じになりますし、相手寄りになりすぎますと媚ヘツライが表に出てつままないですもんね」

「そうなのよ。誰も『お前の話』なんか聞きたくないし、逆に笑わせようと語る話はだいたいおんなじような話なので、飽きるというかくだらないうか」

「確かに……ゴッホの『ひまわり』なんて、『俺の話』でもなく、誰かを悦ばしむるものでもなく」

「でもとても心を打つ。でしょ」

「ここって本質的な問題ですね。」

ちよつと話また寄り道なんですけど、結局テーマというか『話のネタ』の方から追っかけてつて行き詰まったのは、最後やつぱりどういう形であれ『抑圧』って話になるんですね」

「ギューツと抑えつけられて、弾き返す。ドラマツルギーの基本ね」

「それは近代以前だったらいんですけど、近代つていうのは抑圧を自分で作っている、もしくは選択している、もしくは放置している社会システムつまり民主主義と自由主義と同値なんです。だから要するにそこを書くと、

『お前が悪い』

つて書かないとダメなんです」

「それは読みたくないわね。それは読みたくない」

「でしょう。僕だつて嫌です。」

で、マイケル・ジャクソンとか司馬遼太郎、宮崎駿なら、そうじゃない要素で目をくらませつつ主題をそーつと混ぜ込めるかもしれませんが、じゃそこまでの能力が無ければ創作したらあかんのか、と」

「そんなことは無いわ」

「でしよう。」

と考えるとやはり、こつちから考えるのは実は一般的ではないというか、多くの作り手にとつてはちよつと厳しい道なのかな、と」

「またそれに加えて、もし描き切れたとしても、そこで『作者』と『読者』という関係を考える、と、読者から、

『オレが悪いのはわかった。じゃお前はどんなんだ』

とツツコまれるわね」

「一人の人間がすべての社会問題に対してコミットするわけにもいきませんしねえ。人生楽しむのが一番大事なんで……」

「そこで第三者よ。」

俺でもお前でもない、ピエロ登場」

「あつ、そうだ、ピエロに道化に幫間に宦官、化外の者、無縁者が宮廷に居ますね」

「ステークホルダー、利害関係者だと、王や権力者に『正しい情報』を入れられないわよね、どう考えても。」

でも利害関係の外側に居るピエロなら何を言っても無礼講。もちろん悪用もできるけど、真実が入ってくる可能性もある。それでも愚昧な権力者はそこにもお世辞ばかりの役立たずを選ぶん

「だけど」

「『お前が悪い』というのはそのぐらい聞きたくないですよ。

……うーん、まあそう考えると芸術家なんてむかしから化外の者ですから、まあ言えば社会のピエロ役を進んでやらないといけないのかもしれないですね」

「そこで勘違いしがちなのは、個人、個性としてピエロのように振る舞うというのは意味のないこと。別にやつちやダメってことないけど、その必要は必ずしもないわ。ただ精神として、

『この世界を第三者的に見ればこう見えます』

ということを表現することが、役割。まあどれだけ自覚的にやるかという怪しいものだけど」

「そういう資質がある人になるか、あるいはやむにやまれずそこに辿り着いた人って、すなわち社会にズッポリコミットできなかった人ってことで、やっぱり結構第三者的なんですよ。それでも、冷静な意見ってだけで大変貴重ですよ」

「そうね。」

垢抜けない男子が奥さん貰った瞬間、小綺麗な身だしなみになる。もちろん奥さんが服や小物を選んで髪を切れヒゲを剃れとうるさく言うからだけど、これもまともな奥さんというのはつまりいい第三者。

旦那さんⅡ自分が決めると、好き嫌いとかコダワリが大きく影響を及ぼしちゃうわ。もちろんそれはそれでいいんだけど、それと似合う似合わないは別なのよね。奥さんになるとそこを中心

に考えるので、他人から見れば『おつ、いい感じに決まってますね』となる」

「僕の友人にもそういうのが何人も居ます。だいたい女性の方が鍛えられてますしね、衣服のセンスは」

「似合う、環境にしつくりくる、というのがだいじなポイントねえ。  
作品づくりでもそうよ。」

その場、その時にスツと『馴染むもの』があつて、それを選んでいく方が往々にしてうまくいくのよ。『好きなもの』でも、『得意なもの』でも、まして『お客さんが喜びそうなもの』でもなく」

「深いですねえ。さすがは芸術の女神様」

「貴方にも経験があると思うけど、何か追い詰められたり、突然振られた仕事だったりして、コダワリも思い入れもなくワーツと勢いだけでやつつけた仕事が高評価だったりしない？」

「ありますあります。」

高一の時に毎年の校内誌に作文載せてもらったことあるんですけど、これがもう、部活の顧問に突然二日か三日で書けつて言われてデヤーツと殴り書いただけの、思い入れも愛情も何もない作文なんですが、好評でしたねえ。今でも母なんか褒めてくれます」

「つまりその対象の突っぱね方が、たまたまいいかんじで第三者的な距離感になったんでしょね」

「また、その逆もありますね。もう掛け値なし命賭け人生賭けでやったのにボロカス言われたり」

「むしろその想いみたいなのが、もちろんそれってとても大切なものなんだけど、作品の枷になつてたのかもしれないわね。親は子どもに干渉し過ぎると良くないのよ」

「うーん。そう例えられれば二の句は継げません」

「こんな話もあるわよ。ヴェテラン歌手の前川清が」

「ほんとに全世界チェックしてるんですね」

「『歩くApple Music』と呼んでちょうだい」

「そんなポツと出感満開の二つ名で呼んでいいんですか」

「前川さん、

『歌に想いなんか込めませんよ』

と言いつつ」

「それは発言として大胆だ。実態はそうかも知れなくても」

「これ続きがあつて、

『そんなもの込めなくても感動させるのがプロ』」

「それはそれでカッコイイなあ。確かに毎晩ディナーショーのたびに、長年尽くして捨てられた女の恨みを憑依させてたら、早死にしそうですね」

「そうね。込める込めないが問題ではなくて、その『女の恨み』がオーディエンスの心に響くか響かないかが問題なのだから」

「我々作り手はどうしてもそこが不安ですから、保証を求めるように、

『これだけ想いを込めたんだから伝わるはずだ』

と思いたくなるんですよ」

「わかるわ、その気持ち。だけどそれ、関係ないのよね」

「そうなんですよねえ……まあでも、程度や効果の差はあれ、一応まともな作り手ならば類似したことはやってますよね」

「そうね。作り手だけではなく、サッカーの本田圭佑君がミランへ移籍した時に『僕の中のリトル・ホンダがそうしろと囁いた』なんて言ってたけど、誰だって無意識でやってることだと思う。頻度や、決断における重みづけは人それぞれだと思うけど」

「……これもまた僕の持論なんです、聞いてくれますか？」

「なんでも聞くわよ、それが神様のメイン仕事」

「ええ。」

『賢い』って性質はつまるところ何かと言うと、『自分を客観視できるかどうか』だと思うんです」

「ほう」

「『賢さ』というのは時々刻々変化する状況・環境に的確に対応し続ける能力のことを指す、と思います。ここの定義が違おうと話は変わってきますが、まあここは僕の定義で。

で、それには何が必要かといえば、『状況・環境』と『自分』との間にあるズレを認識して、それを埋める能力ですよね。

その認識には、いったん『自分』から出る必要がある、と思うんですよ。他の認識方法もあるのかもしれませんが、僕にはちよつと想像つかない。

となると、『自分を必要に应じて客観視できる人』が『賢い人』かなあ、と思うんですね」「なるほど」

「スポーツや芸事で、たとえば『あいつは野球脳はスゴイ』みたいな表現がありますが、それってこの『客観視してズレを処理していく』という能力かな、と思います。

それを『才能がある』と言い、あるいはそのズレを埋める作業のことを、『努力』と言う。ドルトムントを率いて大暴れしたユルゲン・ Klopp 監督、現役時代は二部で終わった選手だったんですが、『一部の頭脳に五部の肉体』と笑ってましたよ。わかってても修正できないと、実現・表現できないわけですね」

「でもその客観視の能力こそが監督として花開いているんだと思うわ。イメージと表現がピッタリ合ってる名選手だったら、そのズレに悩む選手を導けなかったかもしれない」  
「そうですね」

「もう少し単純に言い換えれば、頭悪い人って自分が頭悪いって思っていないのよね。というより、それがつまり『頭悪い』の定義なんだけど。ソクラテスの昔から」

「『ワシはバカだが、自分がバカとわかつてるバカだ』

いやでもそれが難しいんですよ」

「最近にはバカにバカと言ってあげる人減ったしねえ」

「そもそも賢い人はバカには近づきませんからね。この人バカだと気づいたら離れますし」

「それも日本人は黙ってスーッと居なくなるでしょう。あれズルいと思うわ」

「よく海外の観光地なんかで話題になりますね。日本の客はクレームも付けずに二度と来ない、付けてくれ改善するから、と」

「そこも個性といえば個性なんですけどね。クレームもコストですから、黙ってもう二度と行かないのがノーコストだわ。サンクコストは捨てる」

「ま、どこの国でもバカはバカだと思いますが」

「でもツイッターなんかで、主張はともかく論点そのものがズレズレのツイートをドヤ顔でして人見ると、『ああこの人まともな友だちが居ないんだな』と可哀想になるわ。満天下にバカ晒しあげてるわけでしょう、誰か止めてあげないの？」

「バカの周りにはバカが集いますからね。あれ恐ろしいんですよ特にネットにおける高速生態系生成の罨。中心のバカは気持ちいいもんだからどんどんバカ度を増す」

「でも先鋭化し過ぎると知らないうちに外縁から剥がれて行つて、最後は一気にクラッシュするのよね」

「ええ。カルトの潰れ方と同じですね」

「結局のところ、他者の視点になる訓練を積んでないのねえ。他者との議論や折衝の経験が無いと、どこかで言われたことや書いてあるものを『正解』だと思い込みやすいわ。てかぶっちゃけ、現代日本でぼんやり育てばそういう教育しか受けてないわけ」

「最近はどうとも聞きますけどね。現場はがんばってるみたいですよ。先生方は」

「もちろんそれはそうだと思うわ。でも昔からここが問題点じゃない。むしろ最近顕在化しただけよ。それを進歩と言えなくもないけど。」

「そもそも偉そうな態度取ってる時点でバカじゃない。偉いわけでもないのに」

「わはは、そうですね。」

偉そう、ドヤ顔、決め付ける、それは不安の裏返しなんです。具体的事実以外に価値判断が入る発言の場合、当然議論の余地が発生します。そこに謙虚さと聞く耳が必要なのですが、そこで聞いているものを圧迫するような態度を取って議論を前もって潰す、というのは、つまり議論したくない、つてことで、要は自信が無いんですよね。最初からね」

「か、パーツと言いつばなしで気持ちよくなりたいだけか、ね。真実なんかどうでもよくて」  
「まあ、溜まつてる人多いですから。特にネット上では……」

「確かにリアルと同じ振る舞いをする必要もないけど、もしやむにやまれず暴れ回ってしまいうな  
ら、それも問題よ。抑圧があるってことだから」

「そうですね」

「冷笑は最悪よ。何も生まないから。」

賛成でも反対でも行動し議論し学習する。これ基本」

「無責任な位置に居ると人間はなんでもできますし、なにもしませんからね。人も殺せば、人が  
殺されるのを見殺しにできる。豊田商事の会長刺殺事件は強烈な印象でした」

「そうねえ。だからネットだろうがリアルだろうがしょっちゅう嘲笑・冷笑してるような無責任  
な人からは遠ざかった方がいいわね」

「そういう人に限って物事に対して価値判断が入らない、というか要らないからか、妙にクイッ  
クで高効率な動きができて、世俗的に小銭持ったりしてるんですね。賢さとは何の関係もな  
く」

「いるわね、効率のいいバカ」

「いますよ。ネトゲとかやってますと、

『わーこの人何が楽しくてこのゲームやってんだろう』

という生き急ぎ方をしている人、います」

「バカついでに一応芸術担当の神として言わせてもらえれば、いつだってラブ&ピース方向に奉

仕しない奴あアーティストとは呼べないわ。ていうか、生命にひざまづくものを医師と呼ぶように、愛と平和にかしづくものを、芸術家と呼ぶの」

「おっしゃるとおりです」

「そうじゃないのが多すぎるわ、最近」

「戦争中軍に協力したとスケープゴートにされて、日本を追われたフジタの逸話を知らないんでしょう。『アツツ島玉砕』を見て戦争協力だ戦争賛美だと思う人は眼と心が歪んでますよ」

「戦いの日々は長くは続かないわ。平和が戻った時に、いいえ、そもそも歴史に消せない汚点を打つのは恥ずかしいとは思わないのかしら」

「思わないんですよ。そういう人やそういうものは消えていくので、まるで自分が初めてやってるかのような錯覚に陥ってるんじゃないですか。周りも国士だとかなんとか囃しますしね」

「何度も何度も同じこと繰り返して、あんたたちやバカか」

「神様なんとかしてくださいよ」

「その態度がバカだつーのよ。短期的利益を追求しすぎると長期的利益を損なうなんて、気の利いた小学生でも知ってることじゃない」

「それがそうじゃないんですってば。東電は潰れんし東芝は上場廃止にならんしドナルド・ ترامプはいくら暴言吐いても支持率下がらんし、『ある程度大物になるともう潰せない』という思い込みを利用するのはカエサルの手です」

「そうやってWikipediaに後世の人間が読めばうんちやんだとしか思えないようなエピソードを重ねるがいいわ。いい？ 人間マネー掴んだあとはオナーよ。そして榮譽つてものは真善美に貢献しないと決して得られないものだよ」

「そうなんですけど、せまーい範囲の取り巻きが持ちあがるんですってば。それが彼の彼女の世界のすべてになっちゃうわけですよ。丸裸の王様は昔から居る」

「そんな狭い見で生きていると知られること自体が恥だわ。バカどもめ、アフリカを出よ！」

「私たちは出てずいぶん遠くまで来てしまったわけですが」

「だいぶ脱線したわね。ごめんなさいついアーティストの心構え的なところになるとマイアミ・ヒートしてしまつて」

「こちらこそすみません。そうしたバカに陥らぬためにもよき『第三者』を」

「そうそう。この流れで言うとな、自分の中の『第三者』、鋭い感覚でいつでもズレを指摘してできれば解決策も提示してくれるような、そんなStrangerを育てることを上達、というのかも知れないわね」

「天才というのは文字通り、生まれ持つてそういうのが中に居るんでしょうかね」

「逆に言えば、持つて生まれなくても、あとから育てることはできるわよ。まあ、育つ速度や精度にはバラつきがあるでしょうけど。」

「んー、だいたいそうねえ、才能のあるなしと大成するしないはあんまり関係ないわね」

「女神様からご覧になつても？」

「……ていうかね、みんなそれぞれの音とか詩とか絵とか持つてるわよ、だいたい。ほぼ。ただそれをうまく外に出せないだけね。それは、教育とか社会が悪いんだけど」

「いや、そこは難しいところで、最近、幼年期の絵画教育などで似非自由みたいなメソッドがあったりするんですよ。なんかそれっぽい、自由っぽい描かせてるんだけど誰の絵見ても同じ、つていう」

「あー……うん、まあ……」

「あれするぐらいなら公園の木の写生させる方がなんぼもマシかなあ、と思つたりします。文学で言うなら名作の音読や写経ですかね。」

あでも音楽はちよつと違うのかな、こないだ知人の娘さん、幼稚園五歳なんですけど、の盆踊りを観る機会がありましたね」

「盆踊りいいわね。エジプトでもするわよ」

「ホントですか？」

「ミイラとかも墓から出てきてみんなで踊る」

「それ『スリラー』じゃないですか。」

そこで三曲踊つてくれたんですけど、一曲目がビヨンセ、二曲目がちよつと穏やかな曲調のワールド・ミュージックみたいなので、三曲目が『妖怪ウォッチ』正確に言うと『ようかい体操第

「『」

「みなまで言うな」

「一曲目が最高でどんどんダメになつていききました」

「やつぱり。でもそれは『妖怪ウォッチ』やラッキィ池田が悪いわけではなくてね」

「そうなんですよ、『振り付け決まつてるものをその通りやらせる』という行為自体が、子どもの、ひいては人間の持つてるリズム感や躍動感、踊る力を破壊してるんですね。あれ観て『やつぱり『自由に』がいいのかなあ』とも思いました」

「チューブ観てると凄い少年少女居るわよね。歌や踊りは特に。こないだブルース・リーのメンチャクを完璧にコピーしてる九歳が居たわ。ビックリした」

「ところがみんな潰れるんですよ。これが」

「みんなではないわ。若い頃の才能が発露しても、当人のやりたいことは本当にそつちかどうかわからないもの」

「ええまあ、そこはそうですね。やりたくないことは結局伸びませんからね」

「自由、といきなり突き放されても、勘のいい子以外は難しいので、そこはやつぱりお手本や先生が居たほうが、取っ掛かりとしてはいいわね。どうしても」

「いい子ほつたらかして悪い子ひつぱりあげる、つて勉強でもそうなんですけど、そんなことつて本当に必要ですかね。誰も彼もがプロダンサーになるわけでもなし」

「んー、そのへんは難しいけど、やつぱりある程度までは『教えてあげる』方が、その子の世界も広がると思うけど」

「あんまり先生が良すぎると、自分の中の『第三者』が育たない、とか」

「いやあ、どんなジャンルでも、ゆくゆくプロになろうとか、なっちゃった、というような子は、ちいさい頃から『第三者』が芽生えていると思うわよ」

「それはそうかもしれませんが。難しいところですね、ある程度は引つ張らないと箸にも棒にもかからないし、引つ張りすぎると正解を求めるバカになる。紙一重というか、さじ加減というか」

「猫もあるところまでは子どもたちをとて可愛がるけど、ある日子離れ親離れをするのね。テリトリーから追い出して自分で生きろと。ああいう感じかしらねえ」

「教育一般について同じことが言えますよね」

「ええ。普通の学問についても、結局、『どこがわからないかわかる』ということが、わかる領域を広げる第一歩だから」

「だいたいダメ教師は『どこがわからないか言え』って言うんですよ。『わからないことを質問しろ』とか。それがわからんから困っているのに」

「教師自体がわかってないケースが多いから。教師を『わからないことを教える』仕事だと思ひ込むと、自分が『わからない』と言いつらくなるわ」

「あー、なんか僕も、それなりにキャリアの年数だけ重ねてきますと、『表現できないものはな

い』なんて安易に思い込むようになってます」

「よろしくないわね。正解なんてたいてい無いのよ」

「反省します。その場その場で『成解する』なんて言いますよね」

「そうそう。世の中の問題なんてほぼほぼそれなんだから」

「ああ、そういえば第三者が作者と読者の間で口を挟むと、それは世の中、つまり『社会』になりますね」

「そうね。二人の間だけだと、いつの間にかコミュニケーションの普遍性が失われる可能性があるわ。例えば恋人同士がよく、夜のベンチで猫語でしゃべってるでしょう」

「ありますね」

「『うにやにやにや』』

『うん？』

『にや！ にや・にや・にやーっ！』

『にゆにゆゝん……にゆ』

止めなさいよ」

「いやさすがだなと思って」

「これはその二人はいいんだけど、周りから観てさっぱりわからないので、まあ作品にして残していくわね」

「そうですね。『社会』ができる、つてことはそこに『世界』が生じるつてことで」

「『世界を持つてる』作品がやっぱりいい作品よねえ。というか、作品とは新しい世界を生み出すものかもしれない。その世界で作者と読者が楽しく遊ぶ」

「いやーまったくその通りですね。コミケで人気の作品なんかはまさに読者が遊びやすい作品だから、基本いい作品なんですよ」

「日本ではゆるふわ系とか日常系が相変わらず多いんですよ？ それはだから、いいことというか、まっとうな評価なのよ。」

「そういえば、宿で『水曜どうでしょう』を観て」

「どこの宿ですか」

「品プリ。あれなんかも、世界があるというか、男四人旅を第三者として覗きこんでるわけよね」

「ああそうですね。当事者でもないし、彼らは何かいものや価値のあるものを視聴者に見せようとしているわけでもない」

「だからといって素の状態ではない。そこに作り手の技術があるわけね。ここを近松門左衛門は『虚と実の皮膜のうちに芸がある』と」

「ホントですか」

「いやたぶん……」

「『ブラタモリ』とかも、地理歴史知識も確かにおもしろいんですけど、それよりブラブラしてること自体に癒やされる感じがありますね」

「『世界街歩き』とか、あの手の番組がたくさんあつて人気があるのは、このへんに理由がありそうね」

「逆に言うと、日常が息苦しいから別世界に逃げ出したいのかもしれないですけどねえ」

「それも無くはないと思うけど。旅が好きなのと、土着が好きな人は分かれるわね」

「僕は根が生えてる方ですね。気がつけば実家で四四年……」

「ま、両方必要よ人類には。田舎の名家に生まれてご覧なさい、いまでも職業選択の自由もなければ結婚の自由も怪しいのよ。でもそういう人いないと、土着の文化続かないわ。お祭りひとつとってもね」

「そうですね」

あと、確かに三点あれば椅子でも自立しますしGPSで位置決められるので、なんといえますか『視点が三つある』と、作品が自立してくれるのかもしれないですね。小世界として」

「ナザレ人とか三にうるさいじゃない？ 三位一体って」

「ああ、あれ僕何度聞いても『聖霊』って意味分かんないんですよ。父Ⅱ神、子Ⅱイエス、そこまではよくわかるしそれが同じなのわかります。聖霊って」

「あー、あれはたまに伝令に飛んでくる鳩とか、ああいう『その他全部』てことじゃないの？

よく知らないけど」

「いやなんかそれとは違う気がするな……我々インドから東方の人種はどちらかといいますと善と悪あるいは虚と実、二項が対立しつつお互いを内包するような、陰陽図みたいなのが好きなんです」

「困ったらウチのパパ、ラー拜んどけばいいのよ」

「そんないいかげんでいいんですか」

「神様がいいかげんじゃなくて誰がいいかげんになるのよ」

「そのへんの田舎のおじさんみたいな国道沿いのスナックにクルマで乗り付ける感覚嫌いじゃないです」

「ほんと田舎はめっちゃくちゃ考えてる哲学者みたいな人か大脳が存在しないのかと思うぐらい何も考えてない人か二択ね」

「ま都会も似たような気もせんでもないですけどね……」

あ、待てよ、ということとは、我々東洋人は必然的に自分視点の私小説的な方法論に流れがちで、第三者を導入するのには無理があるかも……だから村上先生みたいなゴリゴリ翻訳できたりジャズ喫茶回したりできる、西洋よりの素養とか感覚とか持つてる人でないと」

「だーっ！ それじゃここまでのお話が全部無駄になっちゃうデショ！」

「だって他のワールドクラスつーと大江健三郎先生か安部公房先生でしょう？ 東大出のパリパ

りの知的エリートと、満洲帰りですよ。無理だ。我々土着土人には無理な世界だ」

「諦めないの。芥川賞なんか石原慎太郎でも獲れるフンコロガシみたいな賞よ」

「いやそうかもしれないですけど川端康成に『彼は芥川に似ている』とはなかなか言われませんよ」

「死んだ人間のことはもういいの」

「エジプシャンらしくないお言葉」

「わたしなんだと思ってるの。四六時中ミイラ遊びしてるわけじゃないわ。

いい、ホモ・サピエンスというのはね？」

「は、はい」

「『三項関係』というのをご存知？」

一歳の人間の赤ちゃんが、ママと一緒にいるとするでしょう。

二人で遊んでいると見つめ合ってるわよね。

ところが宅配便のピンポンが鳴ったので、ママがドアの方に目を向ける。

すると赤ちゃんもそちらに目を向ける。

これがあたりまえのようでいて、実はサルはしない行動なの」

「はあ。あ、そうか、『わたし』『ママ』に『ママが見ている物』という三項めが」

「九ヶ月ぐらいで発生するそうなんですけど、『自分』と『他者』が同じ『対象』に対する共通し

た経験をする。これぞまさにコンテンツじゃない？」

「確かにそうですね、作者と読者が同じ物語を共有する」

「そうそう。だから人間には元々、『おはなしを共有する』という機能が備わっているし、また、だからこそいつもおはなしを欲するわけよ。これだけ古今東西の名作傑作が死ぬまで読みきれないほど存在するのに、それだけではなく、いま、周囲のひとと、共有できる、同時に体験できる

『おはなし』が欲しいわけね」

「確かにネットで実況観ながらアニメ観るの楽しいですからね。ゲーム機も最近は共有機能が強化される一方ですよ。またプレイ実況もおもしろいのが多いですね」

「その場合は、自分とゲームすなわち物語の一对一の相対関係だけではなく、観客という三項め、第三者、Strangerが関係してくることで、場がぐっと広がるわけね。それは一对一とは別種の楽しみ方なんだと思うわ」

「確かに、これは全員が全員やるものでもないですね」

「SNSに料理写真貼るのも、好きな人とそうでもない人にくつきり分かれるでしょう。あれもつまり『写真』と『共有する写真』には違いがあつて、そこで好き嫌いが分かれるんでしょう」

「なるほど」  
「なんだか話がちよつと広がりすぎた気もするけど。あんまりそれを変に意識すると世間体とかどつまらんものに触れそうなので」

「そのへん難しいところですね。あくまでいわゆる『他人の目』ではないんですよ。きりとて自分の目でもないし。その点で村上先生の『うなぎ』ってのは含蓄深いなあ」

「逆にイメージしづらいったらありやしないけど。そりゃそこはノーベル賞がどのようというような達人だから」

「うーん、Stranger、Stranger……セルフ・プロデュースとかそのぐらいならまだなんとかイメージできるんですけどねえ」

「なんだったらわたしを思い浮かべてもいいわよ」

「そんな恐れ多い」

「何を言う早見優。わたしやアプロやムーサの連中やブリギッドはそのためにいるのよまあ言えよ。それを人、『祈り』という」

「神頼みじゃないですか」

「頼めるものは神でもなんでも頼めばいいのよ」

「まあそうですけど。とりあえずウチのネコのメツちゃんを想定するところから始めます。でもメツちゃんだとカルカンパウチにしか興味なさそうだな……」

「ふふふ。まあいい作品が書けますことを。お聴きの皆様も」

「はい。」

ああ、今日はどうもありがとうございました。たいへん参考になりました。バッキー先生、こ

の後のご予定は」

「スカイツリー登って浅草で雷おこし買って今日も一泊して明日朝から京都」

「美味しいケーキ屋知ってますよ、あとで教えます」

「助かるわあ。この『食ベログ』で三・七の町家を改造したところより美味しい？」

「そこです。やな時代ですね。」

女神様、最後に何か一言あります？」

「んーそうね、じゃあ、ズラタン・イブラヒモビッチの言葉で」

「スウェーデンのサッカー選手です。実績ある偉大なストライカーなんですが、強烈な俺様キャラでも人気」

「『奥さんの誕生日に何かプレゼントを贈りましたか？』

『いや何も。』

だって彼女には、ズラタンが居るだろ？』」

「オットコマエー。」

え、その言葉と今日の話に何の関係が」

「貴方にはわたしがついている、つてこと」

「ハハー。ありがたいお言葉いただきました。皆様におかれましては創作の女神様に恥じない力作をひねり出されますことを」

「気楽にね。ていきつーじ」

「それではまた来週！ ペイパー・レイディオ『ネバーエンディング・ホリデー』お相手はながたと、特別ゲストはぼくらのモフモフ猫女神、バステト様でした」

「マアッサラーマ」

## ■ 僕はロボット

「ごきげんようエツヴリワン、ながたでございます。

今日も賑々しく始まりますペイパー・レイディオ『ネバーエンディング・ホリデー』、またまたスペッシャル・カラッフルなゲストをお招きしておりますよ、先週の放送が大好評につき急遽今週も出演お願いいたしましたしてご快諾いただきました、さあ皆さんお待ちかねコール&レスポンス、我らがネコマジン、バステト様だー！ テイグリーツス！」

「響け！ ユーフラテス。バツキーまた来ちゃいました。新曲のプロモーションでも無いのに。お邪魔でない？」

「いえいえとんでもない。前回たいへん好評でしてお便りもいっぱいいただきました、疑問質問などもありましたものですから。早速ですが一本読んでもよろしいでしょうか？」

「なんでも答えるわよ、スリーサイズでも、スリーナインのオチでも。ネジあつめ」

「言うなー！ さてそれでは大阪府の悩める一四歳、ラジオネーム『もしかしてピエロ』さんから、

『こんにちはながたさん』

はいこんにちはわ！

『こないだの放送でネコの神様が「うなぎになれ」って言ってたと思うんだけど、マンガとか描く時に、自分じゃなくて、自分じゃないものになって描くって、読者にちよつと失礼だと思うんですけど、そこにとどうですかねがたさん。プレゼントはステッカー希望です』

……と。これなかなか本質を突いた質問ですよ」

「そうね。売られた喧嘩は買うわよ」

「そんな戦鬭的にならんでください」

「小粋なエジプシャン・ジョークよ。  
ここはちよつと頭では理解しづらいところかもしれないけど、『自分でないものになれ』って言うてるわけではなくて、自分でないものの視点に立てば何が見えるか、それを参考にしない、ってことね」

「ここは創作の経験があるか、慣れてるか、ってところでちよつと肚に落ちる落ちないが分かる気がしますね」

「うーん、そうねえ……」

じゃ逆から攻めてみようかしら、わたし達は、ってわたしは神様なのでそんなこと無いんだけど、人間というのは常に自分ではないものになろうとする力が働いていて」

「ハイッ！ ハイハイハイハイハイハイハイ！」

「うるっさいわねもー」

「その話させて！ 得意！ ライフワークみたいなもんだから！」

「貴方の『得意』はイマイチ不安なのよ、一分でまとめられる？ 一時間しゃべらない？」

「六時間しゃべれますけどできるだけ手短にまとめます。」

僕は『ロボット』と言ってるんですけど、人間は比較的容易に自分の感覚・感性・思考・理性・倫理・論理・道德といったものを放り出して、命じられたことを淡々とこなすロボットになります」

「例は枚挙に暇がないわね」

「命じられることは様々、命じるものも様々です。」

工作上、上司が命ずることもありましょう、人生の節目で親が子が妻が夫が命じることもありましょう。神様が命じることもあるし、ポルシェが命じることもあるし、『ラブライブ』が命じることもある」

「要するに、自分の中から湧き出してくるもの『以外』の外部の声に従う、ってことね」

「胸に手を当てて考えれば、そんな対象やそんな経験がゼロだ、という人はまず居ないと思います。そのぐらい普通の、あたりまえのことです。」

もちろん悪いことばかりではありません、自分以外に奉仕する姿勢は、場合によっては自分の欲求に従うよりも馬力が出ることもある」

「芸術の奴隷となることも同じね」

「そうですね。しかし、身体ぶつ壊すほど創作に打ち込む、それは聞こえはカッコイイですが生命体としておかしい。壊れています」

「うん」

「それよりさらに悪いのは、几帳面にまじめに忠実に悪事に手を貸してしまうことになりかねないこと。最も有名な例が、ナチスのアイヒマン」

「絶滅収容所へのユダヤ人輸送計画を立案・実施した人ね。戦後逃げ回っていたのをアルゼンチンまでイスラエルのモサドが捕まえに行つて裁判に掛けたところ」

「『私は命令に従うしか無かつた、従わなければ殺されるだけで、しかも別の人間が同じことをしてただけだ』」。

「たいへん本質的な人類への問いかけです」

「そこで不服従を貫ける人がどのぐらい居るか」

「僕はたぶん無理な気がします」。

彼は特別な人物ではなくて、このように社会的な役割や立場には誰しも弱い。この、人間が役割の『ロボット』と化す様をまざまざと描き出した二つの有名な実験が、ミルグラム実験とスタンフォード監獄実験」

「相手に電流を流せと権威者に言われた被験者の多くが、相手の絶叫を聞いても止めずに致死的なレベルまで与え続けた実験と、看守と囚人という役割を与えられた善男善女がするように振舞

つているうちに甚だしい暴力を使い抑圧を始めた暴走実験。こちらちなみに実験者自体がその状態を異常と感ずることができず外部からの圧力でようやく中止された」

「そう、本当に誰でもそうなる。性格とか関係ない」

「補足すると、これは別に社会システムの縛りが強力な近代に始まった出来事ではなく、一五五〇年ごろフランスはラ・ボエシの『自発的隷従論』に既に書かれているわ。王の貴族の圧政が、と言うが、そんなもの数百人が得物を手にとつて力でひっくり返せばひっくり返るはずで、それをそうしないのは自発的にその状況にとどまつてゐるからだ」

「ありがとうございます。さすがにお詳しいですね」

「いやー神様ですからね、どうやって隷従してもらうかというのは常にみんなで勉強会してまして」

「おっと、そうでした。される側ですね」

「で、そこから、つまり自発的隷従から逃走するにはどうすればよいのでしょうか」

「そこでまずこのロボット化の原因を考えた」

「貴方ホントに科学の子ね」

「自分じゃアドホックでブリコラージュな文系だと思ひ込んでるんですけど、どうしてもこの戯論から入る癖が抜けなくて」

「まあいいわ聞きましょう」

「三つあります」

「でたジョブズ流プレゼン術」

「いやこれはホントに普通に三つになったんですって。ちなみに断るまでもないですが全部実証・根拠レスな妄想仮説なんで聞き流してください。」

えーまず第一に、

・そもそも人間という生き物にはそういうドライビング・フォースがある。

コレの一番の原因はおそらく、脳が糖を喰うから」

「お得意の脳働きたくない説ね。確かにロボットになれば脳はあまり動かさなくて済む」

「だから一旦『こんなもんか』と高を括ったことに対してはどンドン考えることや判断することを止めていく。何かのスキルに習熟する時に実感しますね。あと正常性バイアス」

「空から隕石落ちてきて死ぬんじゃないかと考えていたらまともに生きていけないので、ある程度以上小さなリスクは自動的に無視する働き」

「そうです。これによって多かれ少なかれこのロボット化という働きは、我々人間すべてにいつも掛かってる力、圧力、方向性ではないかと思うんです。しかも近年はですね、特に先進国では食い物と住居がまああるので、生物としてあんまり一生懸命になる必要も無いんですよね」

「つがいの相手もバーチャルでなければいくらでも手に入るし」

「まさに動物園内の動物みたいなもので、だら〜んとしようと思えば、なんにも考えずに過ごそうと思えば、そうできてしまう」

「暇が怖くて動き回る人もたまに居るけど、基本みんな楽なのは大好きよね」

「はい。楽するためにはどんな努力もしてきたのが、人間の特に近代の歴史です。

第二に、

・後天的に環境がそのようにせよと強制する。

親、兄弟、学校、社会。幼稚園どころか公園デビュー時から同調圧力がかかる社会ですからね日本は。学校教育はほとんどが問題突っ込んだら解答が出てくるマシーンを量産する作業です」

「体育ですら組体操とかまだやつてるわね。行進とか。あれ軍事訓練よね。他に意味ある？」

「恐ろしいですね。スポーツやゲーム、それこそ玉入れやパン食い競争にすれば済む話なのに、一糸乱れぬ四列縦隊で行進するのを『練習』するんです。奇習ですよ」

「当然、そこでロボットにならないと仲間はずれになるので、ならざるを得ない」

「ならなければ社会から弾き出されて『いないもの』にされてそれで終わりです。選択肢はない」

「おおコワ」

「でもこれ別に現代日本だけじゃなくてこの国のどんな時代のコミュニティでも『社会』が成立している以上、秩序が必要で、それを強めに求めればどうしても縛りに従え、ということになりますね。むしろいわゆる上流階級や支配者層の方が、この点では厳しいんじゃないかと思えます。」

だからこの面でも、ほとんどの人が網に掛かっている」

「そうね、ではラスト三つ目は」

「で、最後は

・その方が得だからそうしている。

あるいはロボットの方が性格的に向いたり好きだったりする人の割合もそこそこあるでしょう。これは強制と区別がつきづらいついてたり好きだったりする人の割合もそこそこあるでしょう。これは強制と区別がつきづらいついてたり好きだったりする人の割合もそこそこあるでしょう」

「まあ別に無理に分ける必要もないし」

「社会がロボットを求めれば、よいロボットになることが生存戦略として合理的になります。多少ロボット向きの性質で無くても、がんばってロボットになろうとする」

「東大へ行つてね」

「余談ですが、東大は『人の悪いロボット』つまり官僚を量産するところで、京大は『人の悪い人間』つまり研究者を量産するところで、阪大は『人のいいロボット』つまり技術者を量産するところじゃないかと思うんです」

「『人のいい人間』はどこで作られるの」

「たぶん昔は名門私学や地方国公立大が作ってたんじゃないでしょうか。ただ昨今、ロボットの需要が膨らんだのでそのへんもロボット量産方向へ舵を切り」

「じゃ何、もう大学に行かないとか？」

「それか、今は少子化で高校生奪い合いらしいですから、受験勉強なんてくだらないものそんなには必死でしなくても、わりと名の通ったところ入れるみたいですよ」

「お金があれば留学という手もあるけど」

「アメリカや中国も上の方は日本よりさらに酷いロボット大天国らしいですよ、行く意味ゼロ」  
「そっかー。そりゃそうよね」

「東で明治、西で近大が元気なのは偶然じゃないですよ。たぶん学生も教員も『人間』が多いんだと思います。」

あそうだちよつと前に学歴フィルタつていう単語が話題になりましたけど、あれもつまり企業が『どのぐらいロボットになれますか』というのを知りたい場合、学歴つまり受験歴とその結果で測るのが手っ取り早いってだけで」

「逆に言う、そんなフィルタ掛ける会社は『ロボット欲しいです』と明言してくれている正直な会社なんだから」

「自分のロボットネスに自信があるならそういうところ行けばいい。フィルタ通過しないと行けませんけど。人間のひとは『アホか』と言ってこっちから蹴ればいい。」

これも余談ですけどおっちゃんが学生さんに言いたいののは就職活動とかあんなもんホンマね、今年と来年で一八〇度状況が変わる、当てもんみたいなのもんなんで、必死にならないでいいです。テキトーに、フィーリングで」

「それがその場に居るとわからないものなのよ。」

ともあれ、そんな感じで三つの原因があると。よくわかりました、それではそれぞれに対応策を」

「……これが実はそのー、あんまりパツとしなくて、ですね」

「あれ？ 急に勢いが落ちたわね」

「まず第一の『そもそも方向性がある』てのはどうしようもないですよ。せいぜいほつとくそうなるのでいつも気をつけましょう、とかそんな掛け声ぐらいで」

「ディスプレイにポストイットで貼つとく？」

「うーん。ま冗談じゃなくてそんな感じ。あるいはスマホのメモアプリの最上段に常に表示しておくとか。」

ただね、これはたとえば人間はほおっておくと自堕落一辺倒、食っちゃ寝食っちゃ寝で運動不足で生活習慣病」

「人間だけじゃないわ。わたしたち神も常にその危険が」

「ああ、もつと危険ですよね」

「わたし割と細かい仕事ある方だからまだいいけど、竈の神様とか最近急激に仕事が無くなってぶくぶくしてきた」

「うわー……電気釜担当とかコンロは全部竈とみなすとかできないもんですかね」

「……貴方頭いいわね！ それ伝えておくわ！」

「誰も気づかなかつたんですか」

「うちの会社、じゃない神様達古いもんで機械苦手なのよ……無いものとして扱うから」

「そりゃマズい、むしろ新技術が現れたらそれは私のだ、と奪い合うぐらいでない」と

「神様基本的にぐうたらですからねえ……それで」

「ああごめんなさい、だけどそんな風になっちゃうのはみんなわかってるから、朝ちよつと散歩に出かけたり、腹八分目を心がけたりしますよね。まあそれでいいんじゃないかと思うんです」

「遠大な話ねえ。まずその認識が広まるまで時間がかかるわ」

「まあそうなんですけど他にキレのいい解決法も無いし……とりあえずそんな感じでお茶を濁して、第二を飛ばして第三の『意図的にやってる』」

「これは簡単よね。ほつとく」

「そうですね。もうそれは生き方、個人の選択や趣味趣向・向き不向き好き嫌いの話ですので、他人がとやかく言うもんじゃない」

「ただ第三者から見ると、逆方向に無理してるケースも往々にしてあるんだけど」

「御意。しかし、そのケースとも絡むんですが、一番の問題は第二の、いつの間にかロボット作法を刷り込まれた場合、これなんですよ」

「これがややこしいわね。自分ではそうじゃない、と思い込んでいるわけだから」

「そうなんですよ……モラル・ハラスメントの被害者のように『わたしは自由意志でそうやってる』と本気で思い込んでいるので、周りが『ちよつとおかしくなってますよ』と指摘しても黙殺したり、激怒したり」

「だいたいそういう激症反応が出る、つてことは、無意識の奥底ではロボット状態のマズさに気づいてる、つてことなんですけどね」

「そうなんですよ。」

で、そういう場合、そこから本気で引き剥がすとなると、もう脱洗脳みたいな大掛かりな話になります。だから生命の危機でも迫つてない限り、難しい。人的リソース、具体的には家族や支援者それもプロに近い人、が無いと、実行も困難だし」

「そもそも本人が離脱を志向してないわけですからねえ」

「夏樹静子先生の快作に、『腰痛放浪記 椅子がこわい』という一品があります。どこをどうやっても治らない極めて酷い腰痛を患った夏樹先生が、ありとあらゆる治療法を試すお話です」

「腰はたいへんよね」

「ええ。」

大学病院の整形外科部長から、鍼灸整体、各種民間療法にお祓いまで受けて、最終的には心療内科の専門病院に二ヶ月入院して治る、というか治すんです。そのプロセスも興味深いのですが、僕が感銘を受けたのは夏樹先生のモンスター・ペイシエントっぷり。作家ですから猛烈に理詰めかつ言葉責めで主治医を激しく攻撃するわけです」

「イヤねえ」

「ええ。で主治医は見事それに耐え切って返す刀で治しちゃうんですが、このケースで医師がその罵倒に耐えられたのはつまり」

「ああ、夏樹さんには『治そう、治りたい』という意志はあった、ということね」

「そうなんですよ。それがあればどんな困難に直面しても、医師もがんばれる。患者と同じ方向を向いているわけですし、それによつて状況を切り開ける可能性もある」

「そうね。『これでいい』と思つてる人に『変われ』というのは、一種の暴力とも言えるし」

「しかし、そうした隠蔽された抑圧ほど恐ろしいものはないんですよ。どこに噴出するかかわらないですから。生命の危険にだって直結してます。自殺、鬱、外向きに爆発すれば痴漢、放火、

そして無差別殺人」

「もうひとつ問題をややこしくしてるのは、その抑圧って、害の無さそうな、むしろ生きるエネルギーになってそうなものから、殺人の原動力になりそうな極めて危険なものまで、シームレスってことね」

「そーうなんですよ……」

そんな風につらつらと考えていきますと、一概に『ロボット化は悪だ』と簡単に言い切ってです、だからそこから脱せ、なんて言いにくいわけです」

「その極めてエネルギーが必要な離脱プロセスに、あなたはどれだけコミットできますか、もうちょっと言うと、責任は持てますか、みたいな話にもなるわよね」

「……僕のとてもお世話になった人にKさんという人生の大先輩がおられて、この方がそういった引掛かりを持つ若者を見ては、

『かれは〇〇がネックだね』

とズバリおっしゃるのですが、それを伝えてはどうですか、と言うと、

『本気で言うのと、かれを潰してしまおう』

とこう」

「なんとか誤魔化し誤魔化しでも動いている機械に手を突っ込んで、余計に見えても真ん中の方にあるパーツを抜いてしまったら、普通壊れるわよね」

「人間は機械ではないので修復もできましようが、博打ですよね。すくなくとも本人がそれを意識し、それを抜きたいと思っていけない場合は、特に」

「そうねえ」

「状況が普通に変化してその抑圧、『蓋』と言つても『箱』と言つてもいいのですが、そこから偶然抜け出せることも、ありますしね」

「でもその場合は、そこにスッポリ別の何かハマらない？」

「さすが神様ですねえ。その可能性は、高いですね」

「んー、難しいわね」

「結局、『ロボット化』というのは人間が陥る状態のひとつ、というか、われわれ人間てものは『ロボット』と『人間』の裏表を行き来していたり、『ロボット六〇％・人間四〇％』といったスペクトラムを時期や状況・環境に応じて適当に変化させて生きたりしているもののかなあ、と思ったりもします。」

「だからせいぜいできることと言えば、人間はそうのように簡単にロボット成分に満たされて、なにか自分ではないものに奉仕して、大量虐殺でもなんでも平気でやる。そういう生き物である、と肝に銘じて」

「ポストイットに書いてデイスプレイに貼って」

「3Mのね。百均のはダメですよ。」

でまあ、できれば信頼できる家族や友人と、おたがいに、

『ちよつとそれねえ、ながたさん何かわからないものに支配されてる』

とこういうツツコミを入れてもらったり入れたりして、いくしか、ないのかな、と」

「うーん。

言い放つのが好きな貴方には珍しい歯切れの悪さ」

「いやあ……これも相当考えてきたんですが、これこういう比喩が合ってるかどうかわかんないんですけど、男性の女好き・博打好き・酒好きといっしょで、

『ダメだ』

といつても効果がないんですよ、たぶん。

もちろんダメだ、で自制できる人も居るんですけど、全ての人が全ての環境でできるわけではない。むしろそれを強制すると、そのこと自体が抑圧となつて別の問題を引き起こしかねない。無いものとして隠すと、売春も賭博も密造アルコールも、もつとややこしい問題になるわけですから。ギャングが暴れ回つて、中南米の一部のようにまさに地獄が現れる。それはあくまで例ですが」

「となると、その喩えからいえば、管理とかゾーニング？」

「んー、それって具体的にどうやったらいいのか、さっぱりわからないんですけど。そもそもそれがいいのか、それしか無いのかもわかりませんし」

「確かに、異国の神のわたしの目から見ても、日本には特に、

『この人はレールひいたげた方が人生幸せだろうな』

という人は、割という」

「幸せならばいいんで……国民性とか民族性みたいなものも当然あるでしょうしね。逆に、南イタリヤなんか生まれた血中ロボット分の高い人なんかも可哀想ですよ、おそろく」

「コツコツ与えられた仕事をこなしているとみんなから『あいつつまんねー』と言われ」

「あるいは無理をして明るく振舞いカンツォーネを頑張つて歌いしたくもないナンパをし」

「それも辛いわね」

「だからまあ、僕はもうこの点に関しては個人的には手を引こうかな、と言いますか、ま別にいままでも何かしてきたわけでもないんですけど、静観する構えでいいのかな、と。『静観する構え』って言葉として意味わかんないですね」

「うーん。結局、他人のことだし、関係ないといえば関係ないわね」

「関係ないこた無いですよ、僕だつてロボットのなところありますよ」

「あれ、そうなの？」

「いや、やつぱり、なんか文章書いてる時とか相当ロボット感あります。入れ込んだやつて、周り何も見えてませんね。ひどい場合は、日常生活に支障をきたす。いかんいかん、と思つて、いろいろ工夫して人間に還るようにしてはいるんですが、スイッチが入るとどうも……」

「例えばどういう工夫？」

「いや、普通のことです。風呂入ってキモチイイ、とか散歩して気分晴れる、とか、ビール飲みながらアニメ観たりサッカー観たり」

「フィジカルなことが多いわね」

「そうですね。身体性の部分はなかなかロボット化しないですから、そこをトリガーに人間を取り戻す、のがいいかもしれませんね。」

身体部分をロボットにしちゃうのは身体使うプロ、スポーツ選手とかですからね……いや、まあ、僕らでも油断すると手癖でタラタラ〜と書いたりしちゃうので、気をつけないと」

「それは習熟っていういいことでしょう」

「いや、表現そのものだけならまあ、ロボット化自動化もありかな、と思うんですが、これ油断すると、自動で書いた文章に、自分の考え方自体を寄せていく、というとてもおぞましいことが起きるんですよ」

「ああ、それは嫌ねえ」

「イヤでしょう。でもよく起きることなんです。冷静な時なら別にそんなにこだわってないことにも、

『オレは、これに、命を、賭ける!』

とか吼えちゃう」

「あるある、よくやってるわ芸術家はみんな」

「危ないんですよあれ。ラジオをお聴きのみなさんも、口論なんかで自分の発言そのもので過激にヒートアップしていく経験があたりではないかと思うのですが、そんな感じです」

「ある程度は過剰やデフォルメも芸だけどね」

「ある程度、っていうかキャラを売りにするコンテンツ・メーカーの場合は、ですね。島本和彦先生みたいな」

「彼の場合は作風とも一致しているので見苦しくないけども。」

「……そうね、でもやっぱり、良くも悪くもおせっかいかな、と思うわ。それ」

「『ロボットになるな』がですか？」

「うん。わたしなら、

『アホは死ね』

と思つて終わりかな」

「神様なのに！ しかも指摘もしない！」

「多神教ですからねえ。信じたくない人は信じなくていいし。もちろんわたし、ご利益に自信はあるけど、『他の神様がいい』つて言われたら『まあどうぞ』だわ。むしろ一神教のみなさんみたいに、一人一人信じない者を地獄にぷちぷち墮としてる方が『コマメやなー』つて感心する」

「みすみす地獄に行くのを見逃せない、という心証はありませんか。むしろそれが人の心つても

んじゃないですか」

「わたし人じゃないもん。それに好きで行く人も居るしねえ」

「好きな人はしょうがないですが、騙されてる人とか、幼子の頃から刷り込まれてる人とか」

「そのへんは持つて生まれた運命……とかわたし達神が言々とデキレース臭くなつてよくないかな」

「とりあえず今はそこは切り分けて考えましょうか」

「や、ていうか『信仰』つてそうじゃない？ わたし達のロボットになつて、と」

「あー、まあ、言つてみればそうですね。」

でも、あそうだ、ひよつとすると、逆に、悪いテーマについてロボット化してしまわないように一定のルールをあらかじめ決めてしまう、という人類の知恵かもしれませんね、信仰、神様というシステムは」

「まるでワクチンみたいねえ。ちよつと無毒化したの入れて、抗体作る」

「だからたまーに重篤な副反応も……でも、そういう効用はありませんか？」

「確かに、『神様が見ていらつしやる』と思えば滅多なことはできないわよね」

「『仏罰が当たる』とか」

「先週の『第三者』だわ」

「ああ、そうですね。しかも個々人ででつち上げる力が無くても、経典に明文化されてたり、聖

職者が代理で回答してくれたり。便利ですな宗教。ただ、これも一步間違えると」

「ここに対してキツイロボット化してしまつて逆効果になるわけね。それに、本格的に悪い奴あ  
神様信じてても悪いことするからね」

「銀行強盗の前に成功祈つて十字切るんですよね。」

「難しいですね」

「難しいわね。」

結局、繰り返しになつちやうけど、こんな対話を重ねて、

『人間にはロボットになりたがる癖がある』

という認識を徐々に一般化して、おたがい氣をつけることができるようになる、のを期待するし  
かないんじゃないの？」

「ただそれをですね、四五〇年前のラ・ボエシも言つてれば、また孔子の『知』、知ると知らざ  
るを分けるが知、というのもつまりは同じことを言つてて、要するに二五〇〇年前から偉い人が  
同じこと言つてゐるわけですよ……」

「だつて、支配者層からすればロボットのほうが都合がいいもの」

「それが間違いなんですつて。」

ロボット集団はイノベーションが起きない・非常に起こしにくいので、環境が変化したらイチ  
コロなんです。自然の変化でもいいし、技術革新でもいいですし、隣国が攻めてきてもいいんで

すけど。それ結局、支配者層ごと滅ぼす道なので」

「分け与えてみんな貧しくなるより、独り占めしてみんなで死んだ方がいい、と考えて金の卵生む鶏の腹を割くバカはいつの世にもいるわよ。」

そうそう、そもそもロボット化を推し進めるように、安心していいですよ、何も考えなくていいですよ、とサーヴィスするとこれが金になるのよ。当然人は群がるわ」

「なりますねえ。安全安心便利快適。みんな大好き」

「そしてスクリーン・スポーツ・セックス。人は考えなくて済むならお金でも時間でも人生でもなんでも、貴重なもののいくらでも使ってくれるわ」

「それが愚かなことだと大昔から言い続けられてるのに、なぜ同じバカを繰り返すんでしょう。もちろん僕も人のこと言えませんが」

「それは……ファンタジーに生きてるから、じゃないかしら。ファンタジーの繭は居心地いいよ。ああ、心がピヨンピヨンするんじゃないか」

「それだけ現実が辛いんでしょうか」

「それもあるし、ファンタジーの誘惑も高度に強力になってもいるんでしょうね。いまどんなファンタジーもあるもの。タダ同然でネットの向こうから簡単に手に入るし」

「そうですね」

「でも、時々刻々変化する現実に対応を続けていけば、現実を動かさない極端な妄想方向には行

かない、行けないはずよ。あるいは現実とファンタジーをちゃんと切り分けられる」

「そこが堂々巡り、あるいは鶏と卵の関係になつてるのかもしれないね。」

なにか抑圧があつて、ファンタジーに逃げこむと、現実に対応できなくなつて、さらにロボット化する。ロボット化すると、ますます世界が狭くなつて、世界が退屈に重く困難になるので、思考停止のためにさらにファンタジーを強化する」

「うーん。」

ま、とりあえず、辛いと思つたら逃げることね」

「逃げ方も、ちゃんと原因から逃げ出せればいいんですが、アルコールにギャンブルに恋愛にマラソンにと、依存症気味に横にスライド逃避すると、これまたそれ自体が問題を引き起こし」

「それでも、真上から押し潰されて圧死するよりマシよ」

「そうなんですけどねえ。」

まあ、以前は『そこをがんばれ』つて言つてましたから、日本もだいぶ変わつてきてはいると思ふんですけれど」

「親にしてみれば、ニートでも引きこもりでも生きてくれる方がいいわよね」

「それね、僕が子供の頃でしたら、『そんな恥ずかしい人間はウチの子じゃない、死ね』とか、死ねまで言わなくても勘当とか、あたりまえでしたよ。そういう方が珍しい世の中になっただけでも進歩ですね」

「その考え方が極めて異常だ、つていうのはこうして後から、あるいは第三者的に見れば明白にわかるのよね」

「受験に失敗して死ぬ、とか普通でしたからね。完全に社会全体が狂つてゐる。今は『それはおかしい』と思えますから」

「でもひよつとすると別のところが狂つてゐるだけかも知れないわよ」  
「ぎくつ」

神様がそんな言い方しないでくださいよ、説得力ありませんか」

「支配者層や為政者がロボットを欲するのみならず、巧いことやつてゐる要領いい人々にとつても、他の人のロボット比率が高い方が巧いことやり続けられる可能性が高まるしね」

「そうなんですよ。楽に生きられる、たとえば木の実が一年中わんさか成つてゐる森を見つけたとして、それを村人に知らせるかどうか、つて、性格によりますよね」

「あるいは本当の狩場は教えずにちよつとした狩場を教える」

「いやらしい……しかもそういう世故つて表に出ないんですよ。世代間引き継ぎも確実とは言えませんし」

「自分の子や孫ならともかく、ライバル増やしてもしょうがないわよね」

「その考え方も間違つててですね、知識や体験は共有した方がバーストと発達して社会全体がよくなるもので、だからオープンにすること自体を名誉や特許でモチベートしてきたわけで」

「それは人類が延々転けつまろびつ得てきた知恵だけど、直感には反しているのよ」

「相対性理論あたりから知識や理屈が直感に反し始めましたね」

「独占禁止法とかもそうね」

「『部分最適化は全体最適化と一致しない』

とこう文言にすると結構自然な直感に一致するのになあ」

「それは全体最適化からいずれフィードバックがあつて、部分にも大きなメリットがある、という信頼が無いと成立しない直感なのよ。だから、国家という全体が、民衆という部分に巨大な悲劇をもたらした二〇世紀以降、理解はできても参加していきにくい考え方になってるのかもね」

「うーん。

国家ってサイズが大きすぎるんですかねえ。地方都市ぐらいのまとまりでないと『私』と『私の属する集団』の間に強いつながりを認めにくいのかな。ヴェネツィアとか、ハンプブルグとか、江戸の藩とか」

「いまのテーマについての影響だけ考えると、そこはそんなに大きな影響を与えてない気はする。だってこの問題って、地域社会はおろか家族にだって溶けて込んでるわけで、もし『自分』と『社会』につながりを感じにくい、という議題が本当に存在するのなら、そのへんの方がより重要ではないかしら」

「ああ、それはそうですね。」

「ついついこう、大きい方から行っちゃうんです」

「『鳥の目・蟻の目』と言うけど、一番大切なのは人の目よ」

「人の目だと動きつていうのがわかりにくいんですよ、これが」

「そこは我々神様に任せてくれないかしら」

「えー。」

まあ為政者やイデオロギー、あるいはDV配偶者や毒親のロボットになっちゃうよりは、歌の女神様のロボットになつての方が無害ですよね」

「そのとおり。これもベストではないかもしれないけど、少なくとも最悪の状態は避けられる人間の知恵よ」

「まあそれぐらいが関の山かなあ……すいません今日はモヤモヤした話に終始しまして」

「大丈夫よ。」

そうだ。貴方が大人気作でも書いてインタビューで秘訣を聞かれて、

『ロボットにならないことです』

とかなんとか言い放つのはどう？」

「それがねえ。ロボットにならないように気をつけると、毎日わりと幸せなんですよ」

「あはは。ガッツが湧かない？」

「なんていうか、自分が楽しいもの書いてれば、別にウケたり売れたりせんでもええわー……みたいな」

「そのへんがなかなか、『自発的隷従から逃走せよ!』という考え方の広まらない真の理由かもね」

「もう逃げちゃった人は関わりたくないですよカッコ苦笑い」

「わかるわ……アホは勝手に死ぬ」

「出た本日のキーワード。あんまりそんな過激な表現してますと信者減りますよ」

「わたし仮にもアーティストなんだから、多少清志郎な方がいいのよ。」

♪どうしたんだいへへいべいべ♪

♪バツテリーが残り少なくなりました。

でも僕は、そういう視点でモノ言ったり書いたりするからか」

「うん」

「あんまり人が話聞いてくれないですね」

「まさりやそーゆーものよ。ピエロの言ってることだもん聞き流すわ。ロボットにとっては自分を動かす命令と、命令者の意向と、他のロボットとの相関関係だけが『気になる話』なので」

「『アンドロ軍団の鉄クスめ!』」

「『お前は死にはしない。壊されるだけだからな!』」

「『なに!』」

『キャシャーン』の肝は、ロボットを倒すためにロボットになる、つてところですよ」

「そうそう。圧政に対抗するために同じように暴力を使う、ゲリラもしくはテロリストになるという矛盾が主題。でもあれも生ぬるくて、最後に戦い終わって彼は人間に戻れない、という点だけが悲劇なんだけど、あ、またネタバレしちゃった、テヘ」

「そうですね」

「今度は自分が圧政者になってさらに酷い暴力支配をしなきゃ」

「それは子どもにはキツイです。暴力に暴力をもって対抗すると、その負の記憶を文字通り身体に刻みつけて生きていくほかない、落とし前の付け方はそれぐらいしかない、という点はとてよく描けていたと思いますよ」

「あの時代は、『仮面ライダー』とかもそうなんだけど、暴力に対抗するために魂を売って人間ではなくなる、というモチーフが多いわね」

「でもその頃は一応『変身』してたんですよ。区切りは付けてた」

「あるいはロボットに乗ってたわよね」

「よく乗ってましたね。ロボット同士戦ってるんですけど一応人間が操縦してた」

「でもよく考えると所詮兵士同士の殺し合いよね」

「まあそうですね、たまたに異星人から防衛もしますよ、『ヤマト』に『イデオン』に『レ

イズナー』」

「みんな人類とあんまり変わらない相手じゃない。ロボットが間に入ってることでなんだか残酷さや罪悪感を薄めているけど、結局殺し合い。ロボットにはそういう隠蔽性質もあるわね」

「ていうかですね。いまは現実としてロボット使って一方的に殺戮する時代でして」

「現実の方が酷い方向に先に行っちゃったわね。いま一応遠隔操作なだけで、標的設定とトリガーは人間だっけ」

「そんなたぶん言うてるだけです。オペレータのPTSDが問題になってんだから、おそらくオートになってるか、まもなくそうしますよ。勝手に殺してくれる分には罪の意識なんて発生しないから」

「ほんとイヤな時代ねえ。ロボットを操るためにはロボットよりロボットにならなきゃならないなんて」

「なんのためのロボットだ、て感じですね。」

あ、ここからまったくの余談ですが、その点で言うと、日本における人気ロボットの歴史って、僕は『科学技術に対する人々の意識』が投影されてると思うてゐるんです」

「ほほう？」

「まず日本のロボットの嚆矢といえはこの人、『鉄腕アトム』。アニメ一作目が六三年。核戦争の恐怖が実際にあった時代です。前年にキューバ危機」

「ロボットすなわち科学は夢の技術」

「そうです。そしてアトムは人助けもするけどロボット同士でも戦ったり、自分のアイデンティティに悩んだりもする」

「でもアイドルよね。いまでも彼は」

「そうなんです。科学はキラキラ輝いてて、憧れの眼差しで見つめる夢でした。いわば夢の時代です。」

さて第二世代が七四年デビュー、我らが『ドラえもん』。アニメ化は七九年ですが」

「クソ真面目で悩める美少年だったらアトムから、ドラちゃん随分くだけた感じになるわね」

「結局、科学技術っていうのは使い手つまり我々人間次第、というのが浸透してきたわけですね」

「しかも指令を出すのはいつものび太くん」

「よくわかってない人間が、せっかくの素晴らしい性能を持つひみつ道具の数々を、実にくだらないことに使っては最後にしつぺ返しを食らう」

「その頃ね。公害に自然破壊に交通戦争、そして核軍拡競争」

「でも圧倒的に科学が輝いてた時代でもあるんです、新製品や新技術はまさにひみつ道具、ワクワクに溢れてて実生活が変わった。いわば魔法の時代です」

「ドラちゃんがどら焼きにうるさいのはオイルショックの反映かしら」

「そうかもしれないですねえ。」

八〇年代に入ってこの、二面性がある、って傾向はますます強くなって、八〇年に『Dr.スランプ』でアラレちゃんがデビューするわけですよ」

「地球も割れる」

「まず性能が、圧倒的ではあるものの単純なパワー&スピードになって、夢や不思議が消えました。そして彼女はとことん非知性的で、五歳児ぐらいの直感で動く。ウンチついたり全く無駄な行動も多い。千兵衛さんの言うことも全然聞かない。ドラちゃんならまだ話せばわかりますが、彼女と『大人が』つまり人間がコミュニケーションを取るのは一苦勞」

「しかも天才マッド・サイエンティスト製でも、未来から来たわけでもなく、一介のド田舎の青年エンジニアの作品なのよね彼女。このへんも科学の大衆化というか民主化というか」

「そこもポイントですね。結局自分たちが創り出したものなんだと。力の時代、使い方はあなた次第」

「アラレちゃん人気あつたわよね。視聴率四〇%とか」

「彼女は安心できるんですよ。ドラちゃんまではアシモフ先生の『ロボット三原則』とかまじめに考えないといけませんでしたが、アラレちゃんはイービルでは絶対にない。それどころか変な口癖や行動で笑わせてくれる」

「楽しかったわよね。日本全体がそうだったし」

「ええ。プラザ合意前つまりバブル前の八〇年代前半でホントお気楽でよかったですね。上とか前とかだけ見てて」

「本当は水面下で問題が進行してるんですけどね。少子化だってその頃深刻化してきたし」  
「実はそうなんですよ。」

で、時代に乗ってこの方向に進んだのが、八五年デビューの『究極超人あゝる』かな。あゝるは多少運動能力が高かったりコンセントがついてて米飯が炊けたりしますが、基本的に単なる高校生です」

「アラレちゃんよりさらに無害」

「先輩がぶん殴っても抵抗しませんしね。今で言ういじられキャラで、基本ボケ。脳天気な時代だったの、あのボケ加減もフィットしていたんでしょう。いわば、楽しさの時代です」

「ちよつと口を挟むと、彼がわたしの言うStrangerで、彼がロボットで異質な存在であるからこそ『究極超人あゝる』という作品は成立してると思うわ。彼が普通の人間だと、普通の部活もの、ラブコメ、ギャグの域から外れない。彼がいちいち『それってどういうことですか』という問いを投げかけることで、あたりまえに見える高校生活や部活が、実はとても得難い、幸せな経験である」と認識できる」

「その系統の作品はずーつとありますね。『よつばと!』なんかもよつばが居るから、普通の日常つまり世界が輝いて見えるので」

「ほら、やっぱり必要でしょStranger」

「ですね。」

さてバブル崩壊でテンヤワンヤ、世の中落ち着くまでしばらくかかってようやく出てきたロボットは、もはや便利機能といえば掃除ぐらい、あとは『かわいい』というのが最大性能の、

HMX-12マルチ、フロム『To Heart』！ 九七年」

「それは思い入れが強すぎるわ」

「いやいや、彼女こそ、

『ロボットって友だち、あるいは恋人になってくれるだけでいいよな、いやむしろそれをこそやって欲しい』

という事実を全世界に知らしめた革命児」

「あゝるだつてそうじゃない」

「あれは光画部の変人連中の一人なんですよ。あくまでユニークな、観る対象としてのコメディアン。マルチは常識人で、なにより恋愛シミュレーションという原作ゲームシステムとも相まって、そばに居て欲しい存在。いわば愛の時代ですね」

「ふーむ。AIBOと同時期？」

「あれ九九年ですからほぼ同時期ですね。さすがに見てから作ったとは言えないタイミングですが。もちろん九五年がインターネット元年、Windows95が発売されて比較的簡単にネット接続

できるようになった年です。このインパクトがもちろん大きかったんでしょう。

最後のフロンティアは宇宙の果てじゃなくて、隣のおっさんの考えてることだったんですよ。

科学技術の本流は夢の時代、魔法の時代、パワー&スピードの時代、安心安全便利快適時代を通りすぎて、人々の生活をただ楽しくする、この方向にハッキリ舵を切る」

「インターネットて大きいわよね」

「マルチは引つかかった人々が、みんなして狂ったように絵を描いたりSSを書いたりしてそれを共有し合った、かつそれがオープンだったのも画期的ですね。話題が爆発する速度・深さ・広がりが桁違いに大きくなった」

「貴方も引きずり込まれた口ね」

「まったく面目ない。」

ネットによる電脳化の方向は更に進んで、ちょうど一〇年後、〇七年に現れたのが初音ミク。もはや『ロボット』と言つていいのかどうかも不安になりますが、一応『ボーカロイド』と名乗っているの『人工生命体』というくりにすればロボットでしょう」

「実体さえない。歌を歌うだけ。その歌も人間が教える」

「しかし、かけがえのない存在である。音楽、絵、動画。友人や仲間、たくさんの人と一緒に楽しめるコンテンツの柱である、と。」

「ここまで来ると何かに似てませんか」

「……われわれですか」

「イエース、そうなんですよ。最早神様なんです彼女は。神の時代ですね。

という事で、ロボットは夢、魔法、力、楽しさ、愛を経て神になった」

「イデオンとか神様みたいなもんですからね。代執行装置だけど」

「逆に大魔神だつてそうですね。あれ神様っていうけどどう見ても古代ロボットですよねえ」

「結局のところ人間は自分だけでは不安なので、アンカー、錨を打ち込める不動点が欲しいのね。それが人によつては神様だったり、まあ何かだったりするわけだけど、それによつてぐつと安定はするんだけど」

「錨の鎖の範囲からは、出られなくなりますよね」

「打ち込んでる岩が流されれば、それと一緒に流されるし。場合によってはアンカーポイントが砕け散る場合もある」

「カルトはだいたい自重で崩壊しますね」

「こないだも言つたけど、神様を欲する状態にある人は、強い神様を欲するんだけど、あれってどんどん先鋭化していくので、ゆるい人が脱落していくと、止めようがなくなつて暴走して自壊する。わたしたちみたいな古くてゆるい神様がちょーどいいのよ」

「こつそりセールストーク入りました」

「いやいやホントに。」

あつ！ 超大切なことを忘れていたわ！

芸術よ芸術！ ロボタイズの波には芸術で対抗よ！」

「あーつ、そうですね。よい芸術に触れると、『世界は驚きに満ちた場所』という事実が急激に思い起こされて、ハツとしますね」

「逆にいうと、そのガシャガシャツと心と身体を揺さぶるものを芸術といい、エンターテイメントとは質的に差がある。そちらは、どちらかというと『今のままでよし』と心地よく眠らせてくれるものだから」

「だからその人がどういう状態にあるかによつて、ある作品が芸術かどうか、楽しめるものかどうか、つて変わってきますね、なんかあたりまえのこと言ってますが」

「また重い抑圧に曝されている人は、そういう『抑圧に触れてきそうなもの』を無意識に避けたら、観たとしても本当の感覚をシャットダウンさせつつ観たりできちゃうんだけど」

「それでも世界に存在しないよりやマシですよ。どんな偶然や幸運があるかもしれないし」

「また軽い抑圧なら吹き飛ばせるかもしれないし。うん、そうそう。だから貴方もがんばって」

「わはは。僕のはそんないようなもんじゃないですけど。でも、なにか創作するつて、真摯にやれば、自分の心をいくら解放してくれるものですよ。またそれが気持良くてやってる人も多いと思います。」

創作つてほど大掛かりで無くていいんです、なにかモヤモヤしたら、ノートにいま思ったこと

を断片でも雄叫びでもなんでもいいので書き連ねていくと、もう出なくなったら、かなりスッキリしてますよ。これはラクガキでもカラオケでもそうじゃないかなあ」

「できればそれを共有すると、似たような抑圧を抱える人に共感を呼び起こしてそこに浄化、カタルシスが発生すると思うけど」

「そこには技術が必要なので、それは経験値が必要だと思えますけども。

そうですね、不動点、アンカーポイントを欲しがって、それが逆に作用してロボットになってしまう、これが人間の生来の性質だとするなら、それを問題視したり、どうしようとする方が、無駄というか不遜なものの考え方かもしれないですね」

「そうね。打ち込んだアンカーを引き抜く方法とか、あるいは無害そうなものに前もって打ち込んでおくとか」

「と、偉そうなことを言ってますが、僕だっていつガチガチのロボットになっているかもしれない。何かのキッカケで」

「それが怖いところなのよねえ。人間が元々持つてる方向性だとすると、気を抜くとそうなる」

「いくつでも、以前はまともでも。ずつと気をつけておかないと」

「ま、酷くなったら叱ってあげるわ」

「ありがとうございます」

「やっぱりバステト様優しいなあ。我孫子観音様から鞍替えしようかしら」

「あの娘もいい子ね。キャリアもそこそこあるし、人氣もあるわ」

「わ、この余裕」

「さすがに開山一五〇〇年にも満たないような小娘には先輩ヅラしていいでしょー。

音楽と踊りの女神としてまとめさせてもうなら、ロボットの鋼鉄の心の檻を打ち砕くもの、これこそが芸術よ。ビートとリズムとメロディで、生命の根源すなわち魂を震わせる」

「カッコイイ……抱いて!」

「すなわち! 踊るアホウに見るアホウ、同じアホならまいける・じゃく損!」

「本日の結論はそれで。」

楽しそうに踊るのが、他の人を踊らせる一番の近道ですね」

「ウイムシユー。レッツ・ダンシン・オールナイト」

「あ、『もしもしピエロ』さんキーホルダー送りますありますがとね。参考になったかな? ならなかったかなあ。一四歳には難しかったかもしれないけど、録音して二〇年後ぐらいに聞いてみて! 相変わらず意味わかんなかったら、君はステキな人生を送ってるってことさ」

「か、もう完全手遅れなマシーンロボットになってるかね」

「またそんな言い方するー」

「この子、マンガ家目指してるのかしら」

「かわいい記号的なイラストが描いてありますね」

「じゃ『まんが道』は読まない方がいいわよ」

「またそんな。神様だからってあの名作にケチをつけるなんて」

「マンガはもつと気楽に描かなきゃ。描き手が楽しく描いてないのに読んでる方が楽しめるわけないじゃん」

「いやあれもトラブルは作品づくりそのものではなくその周辺で起きてることが多かった気がしますよ」

「テラさんが藤子コンビに言い放った、

『君たちからマンガを取ったら何が残るんだ！』

って失礼な暴言よね。残るわよ『わたし』が」

「全部読んでるじゃないですか。まあまあ、それはああいう熱い時代だったってことで」

「作家の努力や想いなんて読者には知ったこっちゃないからね。鼻ほじりながらペロペロって描いても、おもしろければいいんです」

「確かにそうですね」

「マンガのロボットになるな！ わたしの読みたいのは人間の描いたマンガだ！」

「そのとおり！」

「そうだわ！ エジプトの女神様を主人公にするっていうのはどう？」

「いや神様降ってくる系はもうわりとありますから……」

「三姉妹ぐらいにして、何の変哲もない男の子の家に転がり込むの」

「それ自体何の変哲もないわ。」

さささ、そろそろお時間となりましたペイパー・レイディオ『ネバーエンディング・ホリデー』、今日もお聴きいただきサンクス・ギビング・デー、DJは私ながた、ゲストはJコミックにもお詳しいエジプトの猫女神、バステト様でした。それではまた来週くくく」

「その三姉妹が人類の歴史を何万年も見守るお伽話ってどうかしら。カッコイイロボットに乗りたりしながら」

「終わらないからダメです」

「終わらないからいいのよ」

## ■ 言葉バラバラ

「はいどうもみなさんビューリホー・毎日がサンデー！ 永遠の素浪人・ながたです、本日も定刻に発射いたしますのはペイパー・レイディオ『ネバーエンディング・ホリデー』、さあ今日も珍奇でビッグなゲストをお呼びいたしておりますよ、そのセクシーはまさに北アフリカを吹き荒れるシロツコ、キャット・バッド・ウーマン、イエス！ ミズ・バステト！ テイグリス！」

「黄河！ レギュラーかわたし」

「お願いしてもいいですか、人気爆発で『お前より彼女を出せ』とファックスがたくさん来るとです」

「ファックスでまだ来るの」

「思いの丈を伝えるには自筆が一番ですからね。ほらハガキに封書もまだこんなに来ます。フフ、この人なんかご丁寧にわざわざ血文字で」

「コワッ。みんな暇なのね」

「ウチのリスナーになんてこと言うんです。みんな寂しいんです」

「なにはともあれお座敷が掛かるというのは客商売として喜ばしいことでございまして。ありがとうございます、呼ばれればどこでも行きますわ！」

「やっぱり神様でも嬉しいもんですか」

「特にアジアはわたしぜんぜん知名度無くて。おとうちゃんぐらいですね皆さんご存知なのはね」

「ラーさんですね」

「餃子食べる時にかける辛いのあるでしょう。あれはウチの父があまりにHOT!な男なのであの名前が付いたのよ?」

「嘘はいけません」

「エジプトといいますとスフィンクスちゃんとかね、ツタンカーメン少年とかね、吉村作治とかあちら方面行っちゃいますでしょみなさん」

「クフ王、メンカフラー王、そしてクレオパトラ」

「わたしに比べりや彼女なんて、ねえ?」

「はいはい、お美しいですお美しいです。クレオパトラさん見たことないですけど」

「これを機に日本でもグツとこう。グッツが作られてバンバン売れてロイヤリティがガッポガッポ」

「せいぜいコミケで同人誌が売られるぐらいですよ」

「エロティックな妄想は止めて!」

「同人誌と聞いて即一八禁を想像するのがエロ妄想です」

「いやあ、でもあんまり最初から濃いキャラ付けしちゃうとね、あとからそれを払拭するのが大変かナー？　吉幾三を見て、未だに『俺ら東京さ行ぐだ』の人だもの。どんなに切々と『雪国』歌っても」

「彼の場合は二の線も三の線もいけますからちようど良かったんじゃないですかね」

「今日は雑談でおよろしいの？」

「あ、はい、えー、もうなんでも。前回も放送中から、

『ながたうるさい、ばっちゃんにしゃべらせろ』

というお叱りいっぱいいただきましたきましてですね」

「光荣ね。あ、じゃあ、夏らしい歌とか唄っちゃいましょうか」

「『カイロ音頭』とかそういうものですか」

「『夏のヒロイン』河合奈保子」

「また我々の世代でも忘却の彼方にあるようなナツメロを」

「♪なあゝつうのおゝ・ヒロインにー！」

「♪チャンスチャンス！　チャンスチャンス！」

「覚えてるじゃない。奈保子歌も上手いしチチもでかいし、最高よね」

「ちよつと太めなのが絶対いいですよね。」

♪きつと・な・れ・る！」

「♪チャンスチャンス！ チャンスチャンス！

チューブで昔の映像見ると二の腕とか今のアイドルのウエストぐらいあるわ。わたし常々最近の若い子は痩せすぎだと言ってるんだけど」

「ホントそうですよね」

「『かぼちゃワイン』のエルちゃんから何年経っても後継者が現れない。もはや三浦みつるが自分で続編描く勢いよ」

「冷静に見るとエルちゃんも脚長いし細いし、太めというよりガツリて感じかな。でも最近よくやく『ぼっちゃり』の良さも少しずつ理解されてきて、すーぱーそに子とか、ガンブラのアニメのギャン子さんとか、えー『ラブライブ』のド、じゃない希ちゃんとか」

「いい傾向ね」

「でもバッキーご本人はスレンダーですよ」

「仮にもネコですからね。最近はネコも丸っこいのが人気ですけど。なんにでも入りたがるまるちゃんとか。あの子可愛いわね」

「チューブ見てますねえ。マンチやスコはいいですね。ウチのはなんの変哲もない茶トラとサバトラで」

「普通が一番よ普通が。どのような経緯でお飼いになることになったの？」

「ええ、一三年の夏に一四年も居た三兄弟の二匹が立て続けに亡くなって一匹になったので、ネ

コ好きの母がホームセンターのペットコーナーとかよく見てたんですよ」

「ふむふむ」

「しかし買うとなるとあのへんの高級キャッツはお高いですから、本当にピンと来た子でないと……とかなんとかいろいろ言っては、先延ばしにし続けたわけです」

「わかるわ」

「ご近所で子猫が生まれて見に行ったこともあるんですけど、その子結構可愛かったんですが、希望のメスではなくてオスで」

「オスはお嫌い？」

「その前に居たのが一匹、尿管結石で死にかけたあとスプレーしまくるようになったちゃって。母はそれでもうオスは嫌だと」

「臭いでもんね、ネコのおしっこ」

「あれ何の成分入ってるか知りませんがホント臭いですよね。でまあ、そんなこんなしてたら、ある日突然、弟が拾ってきたんです、ブサイクなしかもオスを」

「あらま」

「副鼻腔炎やって目やニ鼻水垂れ流し、耳は耳ダニで真っ黒、もちろん体中ノミだらけ。はつきりしない模様のサバトラで、痩せつぽうちでもういいとこひとつもない」

「でも、拾っちゃったら世話するしかないわねえ」

「そうなんですよ。で、世話してると可愛くなってくるもんです。幸いトイレは一発で覚えたし、気性も荒くないので前から居たのとの相性もまあまあで」

「よかつたじゃない。ペットは、出会いね」

「ええ。」

「……でそれで思ったんですけど、運命って、ホント不思議ですね」

「そうね。ネコなんて目につく範囲でも何十匹も居るのに」

「突然やってくるんですよ。まあその前に飼って一匹残ってるのも、四匹まとめて拾ったんですけどね。墓地で」

「来るべき時に来るのよ」

「そうとしか言えないんですよね。これ一年半ズレたら飼ってないわけだし」

「そもそも弟さんがその場を通りがかかるのが一〇分、早いか遅いかしてたら、飼ってないじゃない？」

「そうなんですよ。不思議ですね」

「わたしは運命担当じゃないから詳しいメカニズムは知らないんだけど、でも、そういう風になつてみたいよ」

「そういう風、というのは、出会うものは出会い、別れるものは別れる、みたいな？」

「ええ。」

なんていうんでしょねえ……受け入れる心？ やわらかいところがあると、ふと、あたらしい何かがやってくるのよ」

「それを幸運って言うんですかねえ。」

いや幸運といえば私去年、『ジャパン・イズ・バック』という安富先生の本のライティングをさせていただきました」

「読んだわよ。なかなかおもしろかった」

「えっ。それはどうもありがとうございます。日本の政治や文化にご興味おありですか」

「もちろん。進出先のマーケティングは基本中の基本よ」

「ハー、勉強家ですねえ。黒柳徹子さんみたい」

「フフン。神様ですからね。で？」

「あそれで、ひよんな成り行きと勢いで表紙のイラスト描かせてもらってますね」

「あれ貴方だったの。安部首相の軍服姿」

「はあ。デザイン発案は僕じゃないんですけどね。実は僕、絵を描くのが好きで、生まれ変わったら絵描きさんになりたいと思ってるぐらいで」

「そんなこと言ってる今からなりなさいよ」

「いやあ……なったらなつたで『生まれ変わったら脚本書きたい』とか言ってるに決まってるの  
で……」

「ジャッキー・イクスみたいに、フォーミュラも速い耐久も速いラリーも速い」

「ジャッキーといえばマツダがル・マンを勝った時の、トップのメルセデスに次ぐ二位に上がって「これで十分じゃないか」という空気が漂いつつあった時に、

『プッシュしろ、メルセデスもペースを上げて必ず壊れる』

はカッコ良かったですね。さすが六勝もしていると勝ち方がわかってる」

「その一言だけのために、高いお金払ってアドバイザーに付いてもらったわけ」

「いやそれが、勝ったんでご祝儀のボーナス出そうとしたら、

『マツダを勝たせるのが私の仕事。私は仕事をしただけだ』

と固辞したんですよ。カッコよすぎるにもほどがある」

「つまりジャッキーって名前を付ければ男前になれるってわけ？ ジャッキー・イクスにジャッ

キー・チェン、そしてジャッキー佐藤」

「出た元祖兄貴型姉貴。ラブリーエンジェルと呼び」

「あれでホットパンツ好きになっちゃった男の子を知ってるわ。罪深いわね土器手司」

「土器手さんの前に安彦良和先生が御自ら表紙と挿絵を描いておられてですね」

「三〇周年てのが信じられない『ダーティペア』の話はいいのよ」

「僕アニメ化決定の速報を家でラジオで聴いて、思わずガッツポーズしちゃいましたよ」

「青春ねえ。」

それでイクスがどうしたの？」

「あそれで、思いもかけず仮にも書籍の表紙をですね、僕の絵が飾ってですね、本屋さんの店頭  
に並んだわけです。その時はバタバタしてたし、自分が望んで描いた絵でも無かったのになん  
とも思わなかったんですが、あとでフト、エライ幸運だったな、と」

「そうねえ。本職イラストレーターだって本の表紙やれるとは限らないわよ」

「そうなんですよ。これで今生の絵の幸運使い果たした気がしますけど。」

それですすね、これも、本人がなにも強烈に望んだことでも、必死に運動や営業やアピールし  
てもぎ取ったり勝ち取ったりしたものでもなく」

「転がり込んできたものなのね」

「しかもしょっちゅう描いてるギャル絵ではなく、得意でも好きでも数こなしてるわけでもない  
似顔絵ですよ。なんですかこりゃ」

「あるわよあるある、そういうことも」

「と思えばですね、逆に不運というか、『なんでそれ上手く行かない？』てこともあったんです。  
ある知人が、ある企業のトップと長年のお付き合いで、『ながた君その仕事あげるわ』『わ  
ーいありがとうございます』みたいなお話があつてですね」

「いいじゃない」

「ところがなんだかんだすつたもんだで」

「あいまの新井素子っぽい」

「素ちゃん先生は我々世代の永遠のアイドルなんです！ 我々はみんな素子チルドレン！ ていうかラノベっていいジャンルを創ったのはおそらく新井素子ですよ。」

それはいいんですけど。一〇ヶ月ぐらい引つ張つて結局ご破算になったんです」

「また引つ張られたわねー」

「ご破算はいいんですけど、言を左右してウヤムヤやられたのがなかなか堪えました。打ち合わせするぞ、つてスケジュール入れてキャンセルされたのが五回六回ではなく」

「そういうのが一番しんどいわね。こっち時間とか仕事とか空けて待つてゐるわけよね」

「そうなんですよ。最後はその間に入ってくれた知人がむしろブチギレて、『ワシがお前らここにナンボ貸しあんねん！』とまで言つて喧嘩してくれましたけど、その人にもあまりに迷惑掛けてるので、結局こつちからお断りました。」

つまりそういう、普通に考えたらスムーズに進行しないはずがないことも、時と場合によつては潰れる」

「そうね」

「いい方でも悪い方でも、こういうケースに当たるたびに、まるでお釈迦様の手のひらで動いてて、『ここから先に行つてはいけませんよ』つて所に、こう、指が五本揃つて立っている。私達は、僕は、それにぶち当たつて、鼻面を押さえながら違う方向に進み直す。と、今度は一歩踏み

出すといきなり足元が滑り台になって、びゅーん！となんの努力も無しに凄いスピードで知らないところ、想像もしないところに連れて行かれる。

これは……なんなんでしょう」

「だから、運命よ」

「じゃ人間の意志とか作為とか努力とかは無意味ですかね」

「そんなことはないわ。」

例えば絵の話だって、やってみますか？と言われた時に応えられたのは、普段から絵を描き続けてきたからだろうし、勇気を奮ったからだろうし、できた絵がプロから見てもまあ表紙に使ってもいいかな程度だったのは、頑張って丁寧に描いたからでしょうし」

「地球の歴史には生物の大絶滅であるじゃないですか」

「八〇%を超えるものだけで五回もあるわね」

「一番大きいP T境界の九〇%から九五%の種が滅んだ、と言われます。そんなの生き残るってありていにはええ運じゃないですか。じゃ、進化論とか無意味ですかね」

「でもそこをくぐり抜けたあとは進化論だから。たぶん。」

そこはねえ、どちらも必要なのよ。

『人事を尽くして天命を待つ』。

昔の人はいいこと言ってるわ。ある日地震が津波が台風が噴火が来るからといって、人は生き

ることを止めるわけにはいかないじゃない」

「そうなんですけどねえ。」

なんかこう、普段やつてることと、幸運のやつてきかたのベクトルがバラバラな気がして……つて、それは僕が普段やつてることがあまりいい方向じゃないってことですかね」

「言いにくいけれど、そうかもしれないわね、もしかすると」

「ええー……じゃなんでしよう僕は文章とか書いてないで、レアメタルで一儲けするために中国語の勉強でもした方がいいんですかねー」

「それはちよつと極端だけど、いつ全く新しい展開が来ても、もしそれにピンときたら、パツと動けるころのやわらかさは持つていたいわよね」

「そう考えると今までの人生で随分分岐路をスルーしてきたような気もしてきたなあ……」

「ま、そうはいつでも、現実には、今の自分以外では無いわけだから」

「まあそうなんですけど。」

「そういえば、量子論に『多世界解釈』つてのがありますよね」

「今のこの状態には、すべての選択肢が重ね合わさっている、みたいな？」

「そうです。量子論の研究者さんの間でも議論の分かれるところだそうですけど。」

あれ初めて聞いた時はファンタジーだなあ、と思っただけなんですけど、こんな風に考えてくると、ウチのネコと出会わない僕が今別の世界に居るかもしれないし、マンガ家になつて僕が

別にいるかもしれない」

「しないわね。」

でもそれでも、貴方ならユヴェントスの一〇番はやってないわ。だからそこ、人間の意志とか、努力とか、向き不向きとか好き嫌いとか、そういうものが存在するのよ」

「うーん」

「怪獣・羽生善治が言ってたんだけど、だいたい将棋の手でもある局面で無限にあるわけじゃなくて、有力候補は二つ三つだそうよ。それを徹底的に読んでみる。そんな感じじゃない、人間の運命も」

「まあ、そんな感じなのかもしれませんね。」

運命って、難しいなあ……」

「難しいというより、どうしようもないんだから、もう考えないことね。目の前に降ってきたことに、全力投球！」

「でもね、人間には想像力つてものがあります。これがまた、人間と動物を分けるひとつの特徴だと思います。もちろん素晴らしい機能なんですけど、こうして時として悩みや戸惑いも生む」

「そこが人生の味じゃない。じゃ想像力捨てたい？」

「とんでもないッス」

「じゃあ、それとうまく付き合わなきゃ。もうあるものだし、捨てられないものなんだから。こ

れ自体、人生と同じね」

「そーうですねーえ……」

「あらあら、なになに、いつになく弱気じゃない？ 文章書くの疲れたの？」

「いやいや、そんなことは無いですよ。」

ああでもそういえば、最近本当に、『言葉』って難しいなあ、とよく思います」

「そりゃ難しいわよ。いまさら何言ってるの」

「近年で一番感じたのは、iPhoneは僕3GSの出始めの頃に買ったんですけど、この頃大慌てで造られた国産勢Android機が出てきてですね」

「あつたわねそういう時代が」

「それをニュースなんかで『スマートフォン』ってまとめて呼んでたんですよ。でも御存知の通りその頃のAndroid機にはまともに使えないような酷いデキのものもありました。それと、ちゃんと使えるiPhoneとを『スマホ』ってくくってしまうと、実態を反映しませんよね。『スマホは』すぐ固まるとか、電池が一瞬で無くなるとか、それ『スマホ』じゃなくてその機種が悪いんだ、と」

「それは恣意的にやってることじゃない？」

「いや、なんらかの意図があつてやってたらまだいいんです。もちろん賛成はしませんけど。」

マスコミが能力が足りない、というだけの問題ではなくて、ネット時代でだれでも情報を発信

できるようになつて、あんまり練れてない『言葉』がパーツと拡散するんです。いま起きているコト・モノ・ヒトに対して、ジャスト・ピッタリ of 言葉を選んでるヒマや労力が無くて、おおぐくりな言葉をバツと被せてしまう」

「悪い？」

「ええ。」

そうすると認知が歪むんですよ。

認知が歪むと正確な判断ができなくなるから、対応の仕方がトンチンカンになつて、事態がより悪くなる可能性がある。だから言葉の使い方つて、または言葉つて難しい」

「貴方はあれね、お人好しね。言葉が難しいんじゃないかって、わざと難しく使う人間がいる、つてことなのよ」

「バステ様は性悪説すぎますよ。そりゃ撤退を転進と言うような例はそうでしょうけど、そういうのはかなり特殊なケースで」

「はたして特殊なケースかしら。言葉が生まれた時から、人間はそれを使って騙し合い・殴り合い・殺し合いをしている気がするわ」

「また過激な」

「最近ようやく注目されてきたけど、いじめだけじゃなくハラスメントの多くは言葉の暴力じゃない？ 言葉は人を殺せるのよ。ヘイトスピーチ、誹謗中傷の類だつて、人をイヤな気持ちにさ

せてその日一日、いえ場合によつては一生残る傷を負わせることもできる。

つまり大昔から、言葉というのはいつでも丁寧に取り扱わなければいけない劇物であつて、昨日今日始まつたことじゃないわ。昔の人は本当の名前を隠したんだもの。呪術に使われたら死んだりするから」

「そうですね。僕がポケーッとしてただけですかねえ」

「貴方だけじゃなくて今の人はみんなそうね。言論人や知識人じゃないからって、言葉を乱暴に使つていいわけじゃない」

「『言霊』つて言葉があるぐらいですからね」

「現代人は自分たちが知らない領域に対する敬意が足りなさすぎる」

「ええそれはもう。神様らしいお怒りですね。神罰でも下されますか」

「下さなくてもそういう人は自分でコケるわ。ま、関わり合いにならないことね。非暴力・不服従。マハトマ・ガンディー」

「荒らしは放置、ですね。でも悪口の方がネットでは断然ウケるんですよ。だから発信者の方は合理的判断でも悪口を選ぶ」

「だからそのスマホを手放しなさいって。悪口の方が耳を傾けられる世界って、正常な世界じゃないわ。そんなところに長い時間居てはダメ」

「その世界はあとネコと美味そうなメシ、そしてエロ」

「ダメねえ」

「あ、でもこないだの放送の『Stranger』で、僕がエロ・コンテンツが好きな理由がわかりましたよ」

「はい？ 貴方がスケベいだからじゃなくて？」

「それも否定しませんけど。」

えと、AVでも成年コミックでもいいんですけど、エロというのは『適切な第三者視点』が必須なんです。女性でもなく、男性でもなく、監督」

「ああ、なるほどね」

「あるいは本物の行為ではなく、だからといってお芝居でもなく、そのどちらでもないもの」

「はいまた来ました、『虚と実の皮膜のうちに芸がある』近松門左衛門」

「すべからく創作というか表現というか、それはAV監督やエロ漫画家のように視点を持たねばならない」

「そう？ まあいわゆる実用性が無いとたいへんなお叱りを受ける業界だから、良くも悪くも芸術性・作家性・表現性で突っ張り切れないわね」

「だからってウソっぽいことやらせても、これまた実用性が無いので」

「貴方は大阪人ねえ。実用性なんてもの、普通、創作、芸術には要らないものだ、ってまず真っ先に切るものよ」

「そうですよ。大阪の文化っていうのは、文化コードを必要としないもんなんですって。お笑いに食い物。うまい！ おもしろい！ タイガース！ 本能でOKだったらそれでええんです」

「それって文化って言うのかしら」

「……いや……どうだろう……と、とにかく人生楽しくいかなきゃ」

「それは確かねえ。」

楽しくいくというと、

『悲しいから泣くんじやない、泣くから悲しいんだ』

っていう言葉があるけどさ」

「あ、それ、最近の生化学的な研究でどうやらホントらしいですね。なんか『これを手に取ろう』という意志の信号が脳で発火する前に、すでに手が動いてるとか」

「そこをね、要素分解して見るとそんなふうに不思議に見えるんだけど、つまり全身で『手に取ろう』としてるので、特に矛盾はないのよ。意志が電気信号あるいは化学物質の放出かどうかだつてまだ確定してるわけでもなし。」

で、これを拡張するとつまり、

『楽しいから笑うんじやない、笑うから楽しいんだ』

とか、

『やりたいからやるんじやない、やるとやりたくなるんだ』

になつて、つまり、

『こう！』つて行動すると、『そう』なる。

意思あるところに道できる」

「神様はええこと言わはんなあ」

「日々を楽しむことで満たそうと思つたら、自分で動いて自分の楽しさを自分で創っていくのが一番手っ取り早いわ。貴方もそうでしょう」

「へえ。何かモノ書いてたら、それだけで満足感がありますね」

「web巡回してtwitter見しfacebook見しtumblr見て、そこから何かに悦ばせてもらおうって考えるのが大きな間違い。」

あなたを悦ばせる方法を一番知つているのは、あなた自身なのだから」

「それはちよつと自信ないな」

「そこはもうちよつとところを開いて、柔軟に」

「あー、そこそこ。それも難しいところなんですよ。」

ちよつと話がズレますけど、肩の力を抜いて、とか、阿弥陀様の言うとおり、とか、その脱力方向、『○○しない』つて方向、気分はよくわかるんですけど、なんか頼んなくて物足りなくて、イマイチピンと来ないんですよねえ」

「昔、日本橋の共立電子で見た『デイルバート』のTシャツに

## 『DO NOTHING!』

て書いてあったわ。この精神よ」

「勢いつけて叫びやええつてもんでもないでしょう」

「効率最優先の歪んだ社会に対抗するには、とりあえず『遅くする』『無駄をする』『計画しない』『ゆるくする』などなど、とにかく『しない』がいいと思うわよ？」

「確かにそうなんすけどねえ。もうちょいカッコイ言い方無いかなあ」

「だからその思考そのものが、マーケティング志向というか人の感覚を操作してやろうというか、それが既にイービルなのよ」

「悪とまで言うとは厳しいですが、いま離れようとしている旧来型の考え方はありますね。ほら求心力強いんですよ」

「……昔は良かったわ……みんななにも考えずにわたし達を崇めてくれた」

「それはそれでロボットじゃないですかー。」

確かに僕も一応最近は今計な力を抜こうと、

『たたかわない』『がんばらない』『こだわらない』

略して『TGK』をモットーに」

「三つとも、やってもなんの利益もないもんね」

「それが利益あったのが中世近世近代で、ということは人類は新しいフェーズに突入しつつある

のか？ 新古代みたいな」

「古代ギリシャの民主制は奴隷制度が支えていたわけだけど、いまはコンピュータが支えてくれるわね」

「みんなで悲劇を鑑賞して幾何の問題解いて暮らしましょうよ」

「そうねえ。」

思い出したわ。名医ヒポクラテスが言ってるんだけど、

『病氣になったら何もしないのが、中程度の医者に掛かったぐらいの効果がある』」

「なんでもそうなんですけどシステムってシステムそのものを駆動させる分のエネルギー損失、オーバーヘッド、管理コストが発生するので、明らかにそれ以上のリターンが見込めない時以外は、ノーシステムっていうのも立派な選択肢なんですよ。」

JINSってPC用メガネで当てたカジュアルメガネ屋さんがありますが、あそこ店頭では個人情報報ぜんぶ客に突っ返すんですよ。それによつてDMとか送れなくなりますが、個人情報管理用のコストゼロ。もちろん流出リスクもゼロ。年間数千万か、店頭の作業量を時間割で費用換算すれば億行くんじゃないですか、あの規模の企業なら。ましてちっこいお店が自社ポイントカードとか絶対無駄だと思う」

「そのへんが近代の軛で、大量生産大量消費の時代にはシステムオーバーヘッドが多少あつても同じものを山のように作つて山のように売れば、そのコストを相対的に無視できるサイズにでき

たのよね。

でも創作って基本的に一品物だから、だいたいそういう考え方と相性が悪い」

「創作も同じようなものを大量に生産する必要に駆られましたから。映画もラジオもTVもレコードも、スケジュールが決まってそこに合わせてモノを作るような時代が。いや今も。アニメにゲームにマンガに」

「それはそれで、毎週楽しみにしてるものが『ちよつと気分が乗らないので一週先送りで』というのも難しいけれど」

「ホントにそうですかね？ 『HUNTER×HUNTER』ファンとか見ると別にそれでもいいんじゃないかと思えますけど」

「うーん……」

確かに昔に比べて、人々が使う言葉が、その人その人によつて違う範囲を指していて、意思疎通が難しくなっているような気もしなくもないわ。まるでバベルの塔が壊されたあとのように」

「また、こういう人も居るんですよ。知人に、ポリシーを持たないことによつてそれに拘ることによるデメリット・コストを最小化するという戦略、名づけて『積極的ノンポリ主義』英語に訳すと『アクティブ・ノンポリシー・ポリシー』を採用している人がいます」

「それ『ノンポリ』じゃダメなの？」

「そんな生易しいもんじゃないんですよ。コダワリを持たないことにコダワリを持つ、という勢

いで」

「流されてるわけでもないのね」

「ミーハーなところもあるんですけど、流行ってるから飛びつくという行動もせず、さりとして廃れてるから脱ぐという行動もなく、常に強力に自分本位」

「ちよつと自分の世界が狭い感じかしら」

「そういう言い方もできるかもしれない」

「時代かしらね。こんな複雑な世の中、全部細かく見てらんないというか」

「こういう人が寄り集まると、同じ『スマホ』って言葉が違う意味を持ったりするわけです」

「なるほど。しかもそれを擦り合わせる必要もない」

「どうせ三年過ぎれば捨てるガジェットですからね。説明書読む手間すら無駄だ」

「刹那的ねー！」

「だってさ、聞いてくださいよ、ちよつとまた横道逸れちゃいますけど、いまクルマで自動ブレーキるのが流行っててですね」

「あーなんか見たことあるわCMで」

「これが非常にお客のヒキがいい装備ですので、スズキ・ダイハツの軽二強など全車に装備する勢いです。で、つまりこれが欲しい人にとってみれば、ほんの五年前のこれが付いてないクルマは、全部ガラクタ」

「あーわかるその感覚は」

「そう、ベンツだろうがフェラーリだろうが五〇〇万しようが一〇〇〇万しようが、うちの勝手に停まつて事故起こさないワゴンRの方がステキ・スズキ」

「そりやそうよね」

「こんな時代にね、『先を見据えて』とかね、『普遍的な知恵と体験を得る』とかね、そういうことに訴求力あるのか、と。そりや誰だつてイケアで使い捨て組み立て家具買いますよ、いつどこへ引っ越すかもわからん人生なのに」

「でも、民主主義の根幹は熟議よ。時間を掛けて、おたがいに主張をして、その主張のズレを歩み寄る。そんな時に言葉にズレがあつたら、ますますその作業が大変になる」

「そおなんですよ。ますます言葉はズレていつているのに、ますますそのズレを埋める時間や意識は減っている」

これ、大問題だと思つてゐるんです。あまりクローズアップされてないんですけど」

「うーん……『言葉を大切に』なんて言つても、ピンと来ないでしょうしねえ」

「ええ。繰り返しになりますが、言葉を大切にしないと、認知が歪みます。これが問題なんですよこれが。そこを問題提起したいんですけど」

「あそうそう、それだそれだ。こないだ今季のアニメチェックしてたらさあ」

「はい」

「あるアニメの舞台が、バイオハザードが起きてゾンビだらけになった世界。そこを生き延びる少女たちの話なんだけど」

「それはむしろ懐かしい設定ですね。『バイファム』というか原型は『十五少年漂流記』」

「ちつがーうのよそれが。それヒロインがね、その世界を受け入れられずに、まるで平穏な学園生活を過ごしているかのように日々を生きてるの。つまり認知が歪んでるの。周りはそれに付き合っただけの。まさにいまナウの日本!」

「うわあ。そんなアニメが放送されるような時代になりましたか……」

「もう一つは下ネタが存在しないことになっている世界って設定で」

「ほう、それはおもしろそうですね」

「それもヒロインが、あからさまなエロ画像を『女の子がキノコを食べている』って認知してるのよ。もちろん我々視聴者にはエロ画像なのね」

「ははあ……完全に今の日本、というか世界ですね。」

しかしそういう社会の最先端の問題点を、アニメやラノベや四コマが抉り出してる、これまさにクールザパン」

「のんきなこと言ってる場合じゃないわよ。社会が歪みきってる証拠じゃない」

「いや、革命は常に周辺から起きるものですよ。中央の人間は、世界がどんなに歪みきつていようと今のシステムから利益を得ているので、それを否定するインセンティブがありませんから」

「そうだけどね。」

わたし達古き神々も周辺に追いやられて久しいわ。そろそろ一丁なにかブチかましたいところね」

「暴力は止めてくださいよくれぐれも。」

認知が歪むから言葉が現実を表現しきれなくなってきたのか、はたまた言葉が表現力を落としていくから認知が歪むのか」

「その両方向でしようねえ。ループになって、どんどん乖離が激しくなっていく」

「『現場・現物・現実』という品質・新型車の魅力・レース結果、どこでも絶好調のホンダのフィロソフィーですが」

「その皮肉癖止めないと政府の犬になれないわよ」

「わたしやホンダ車新車で四台買つてる大のホンダ党ですよ！ 多少嘆く資格はあるでしょうが！ ちなみにホンダ・ホンダ・ホンダ・プジョー・シトロエン・ホンダ・ルノー・マツダ」

「偏屈ねえ」

「マクラーレン自体一四年シーズンの時点でメルセデスユーザーで最下位でしたから相当アレだったのに、ほとんどホンダのせいにされてるのは可哀想だし、リコールもエアバッグはタカタの問題ですしね」

「悪いときや悪いことが重なるもんよ。じつと耐える時期が人生には必要」

「近年絶好調のマツダもスバルも『もう潰れる』て時期ありましたしね。それ考えりやまだフィットに軽にステップと売るもんあるだけまだマシだ。それはいいんですけど。」

なんぼなんのかの言うても『現実』っていうのが一番情報がある、広帯域なものでして」

「そりや頭の中で考えてることなんか比べ物にならないわ。少なくとも一〇倍、一〇〇倍」

「いやあ千倍万倍でしょう。クルマで思い出しましたけど僕が昔、初めてF1鈴鹿に観に行つて感動したのがですね」

「マシンの速さや美しさかしら」

「ミナルディのグラクサ加減！ 当時はミハエルの乗るフェラーリやモントーヤのBMWが速かつたんですが、そりやもうあなたそれらに比べりや、露骨にポンコツなんですよ。全体がバラバラに動いてて、あれTVじゃ伝わらないんですよ。なんていうか……あ、そう、マジンガーZとボスロボットぐらい差がある」

「ボロカス言うわね」

「いや、それで僕むしろ感動したんです。ボスロボットでマジンガーに立ち向かうわけですよミナルディのドライバーとスタッフは。そんなもん生身で殴り合うより可能性無いじゃないですか。これをスポーツマンシップと呼ばずになんと呼びますか」

「最先端のものほど一年二年の違いが大きいわね。スマホとかそうなんですよ？」  
「ええ。」

で、つまり、このように現実をもとに認知すると、世界の見方がシャキッとより正しい方向へ修正されると思います。一〇〇%完璧ではないにしても」

「そうよね」

「あるいは、僕『星の王子くん』書いた時に気合入れすぎて、相当準備というかプロットの段階で練りに練り倒してたんですが、いざ書き始めたらどんどん『こっちの方がいいな』てところが出てきて、結局そこから先のプロットが無駄に」

「それぞ芸術よ。製造業の生産計画表じゃあるまいし、そうでないものなんてダメだわ。セッションですから。なんでも。ライブですから。なんでも。目の前の現実しかない」

「現実にあプローチできない時も、できるだけ一次情報なり当事者の体験や言葉なりに当たりたいものですねぇ」

「マスコミでさえ頼りになんないのに、ネットとなるともう何次情報かわからないものね。何かあつて、2ちゃんに書き込まれて、まとめサイトに載つて、ツイッターで広まつて、Togetherでまたまとめられて」

「また巧妙にまとまつてるんでボーツと読みやすいんですよ。それで歪んだ見識を手に入れて、あとで恥をかく」

「常に野次馬ならいいんだけどね」

「人間そう簡単に態度を切り替えるのは難しいですよ。野次馬癖付いちゃうと、たとえば政治の

話題って常に自分にも振りかかる話のはずですが、そこで野次馬姿勢を取ってしまう。これだけですごく恥ずかしいことですよ。建前だけでも民主主義ですから日本は。主張がどっち向きであれ、参加してない、つてのは。選挙行つてませんと叫ぶようなもんで」

「そういうことよね。でも認知つて、歪みはじめると何もかもが歪みだすのよ。嘘をつき始めると、どんどん嘘つきまくらなきやならなくなるように」

「ええ……」

「ま、自分なりの基準をもつて、ふつうに自分にとって『気持ち悪いこと』には近づかない方がいいわね」

「基本的に前向き・上向き・ステキ向きで」

「キュレーションメディアなんかで、『いいはなし』ばかり集めたのもあるわよね。でもあれも結局、ネコかエコかレゴなの」

「あはは。いい話そんな毎日あるわけでもないですし、基本退屈なもんですからね、いい話での。天国と同じで」

「それでもそういううちよつといい話も、歪んだ認知を整える契機になるかもしれないわ。もつとネコを崇めなさい」

「ははーっ」

しかし社会の動きが激しすぎて、言葉が付いて行けません。そりゃ認知も歪むつてもんですよ。

こないだね、ミスド、ミスタードーナツがギリ貧だと経済誌で読みまして」

「そういえば最近行つてないわねえ」

「そりゃクリスピー・クリーム・ドーナツの上陸とかコンビニのドーナツ開始とか、いろいろ外的要因もあると思いますが、もう一六年ほど毎週のようにミスドに通い詰めているワタクシとしては」

「はい」

「単純に『ドーナツがマズくなった』『珈琲がマズくなった』『内装に個性が無くなった』そして『スクラッチカードが無くなった』と非常にフィジカルに劣化してるんですよ」

「なるほど。まずそれらを元に戻せ話はそれからだ、と」

「ええ。これをね、机上の空論で観念論やコンセプト論をやいのやいの言つててもしょうがないんです。現場出て、長年の常連客にまず聞けば、答えは帰ってくる」

「そういう時、言葉は無力ね」

「というより、強力な言葉を見つけるには、現場・現物・現実に当たらなければならない、と。」

「意志とか意図とか努力とか、そういうものももちろん大事なんですけど」

「もちろんね」

「ただ現実を見ずに、ヘタな言葉をヘタに使って歪んだ認知をして、それに基づいて明後日の方向に突き進むと、それらはむしろ害毒になりますね」

「まさに太平洋戦争に突き進んでいった頃の日本ねえ」

「『満洲暴走 隠された構造』にそのへんの様子を書きましたので、ぜひ読んでみてください。」

中身考えたのは安富先生で僕は字を書いただけですけど、ただそういう暴走を目の当たりにすると、結局、さっきの『中程度の医者』じゃないですけど、ヘタにそういう『強い意志を持つて』とか」

「『決める時に決める』とか」

「そういうことを言ったりやったりするより、それこそ『DO NOTHING!』あるいは『働いたら負け』の方がまだ」

「いや後半はわたし言つてない。」

でもそうね、だからイスラームでよく『インシャアッラー』、アッラーの思し召しのままに、つて言うのよ。あれは人間の知恵ね。どうしようもないことも、あるもの。どうしようもないことまでどうかしようと思うから、ややこしくなるのよ」

「おつしやるとおりです。」

そうそう、それで思い出したどうでもいい話ですけど、僕昔落ち込んだ時に、ふと壊れかけのレディオからビートルズの『Let it be』が流れてきてですね」

「いいタイミングじゃない、担当神の小粋な計らいね」

「柄にもなくジーンと来て、」

「そうだなあ、そうだ。『なせばなる』！」

「アハハ、逆よ。『なるようになる』」

「大卒直後にTOEIC四五五点の抜群の英語力を発揮してしまいました。

まあそれは冗談ですけど、そういう脱力をぽかーんとして、

『阿・弥・陀・さ・ま・の・言・う・と・お・り』

てのもあながち間違っていないと思います。それは決して諦めでも自暴自棄でもなく、歪んだ認知に基づく間違った方向への突進を止める知恵なんですよ。それだけでも道は拓ける」

「ね、神様って便利でしょ」

「ええ。ただここでまた言葉の問題が再浮上してですね」

「なに？」

「やつぱり、この議論全体を表現する、いい言葉が浮かばないんですよ。『脱成長』とか『降りていく』とか、そういうマイナス方向の言葉を使うのはインパクトが弱い」

「イメージ悪いわね。そもそもカウンターってわけではないし」

「反原発脱原発、反戦、スローフード。カウンターワード出した瞬間に、相手の土俵に乗ってるってわけだから戦略的には半分負けてるんですよ。そうじゃなくて、『こっちの方がいい』ってことを新語でズバッと言わなきゃ」

「そういう意味では言を左右にするようですが、『スマホ』って言葉は強かった」

「新しい時代来た、って感じよね。乗るしかないこのビッグウェーブに。あの当時ならガラケートどちらも一長一短って感じだったのに」

「ええ。いうても人間は新しいものの、いいもの、それから儲かるものに弱いですからねえ。その感覚をくすぐらないと」

「そのへんは貴方がた『言葉遣い』の出版でしようが」

「はい、まあ、がんばりたいと思います。でも僕はそこで多少泥被る覚悟で、

『これからはスマートフォン!』

と絶叫できるタイプじゃないんですよ……」

「それが大人になるってことよ」

「いつまでも一七歳でいたい……」

「森高も二児のママよ」

「いつまでも綺麗で恐ろしいですね。あれは洋介から何か吸ってますね」

「志村けんとかも周囲の若い女性からいろいろ吸ってるらしいわよ。若手談」

「元気ですもん。さんまさんとかも。あんな還暦に絶対なれないわ……このへんのオカルティズムは神様のお得意では」

「妖怪変化の類は専門外よ。わたしの力は綺麗な力」

「力は力じゃないんですかね。」

それはともかくだ。底ぬけ脱線ゲームです。ね今日は」

「貴方がまとめないからじゃない」

「ライヴ感・グルーヴ感そして阿弥陀籤感を大切にしよう」と原理原則方向性を放棄しましたらこんな悲惨な事態に」

「ラジオらしくていいんじゃない？ NHKのTV番組みたいに予定調和だったら誰も聞かないわよラジオなんて」

「フオローありがとうございます。僕も同人誌てのは『何が飛び出すかわからない』のがいいんだと思います。ここで天気予報入れて休憩しましょか」

「お茶淹れてくるわ」

「あつ、あのカルカデってハイビスカスティーですか？ 僕も一度飲んでみたいと」

「くまモン印の大阿蘇万能茶に決まってるじゃない。村田園の。あーたエジプト旅行行って午後ティー飲むの？」

「ごめんなさいもう言いません。ウエザーニュースの山田さん……」

## ■ いつも心に神様を

「えー再開です。」

最近日本では憲法に注目が集まっててですね」

「終戦直後以来、初めてまともに日本人が憲法に向き合ったんじゃないかしら」

「首相どころか与党議員が全員、『立憲主義』をご存じない国ですからね。あ、その件でまたちよつと本題前に脇道に逸れるんですけど、安保法案で自民でほぼ唯一反対してた村上誠一郎議員が、前回の総裁選についておもしろいことを言っていたんです。全国黨員票では石破茂がダブルスコアで安倍晋三に勝ってたんですが、国会議員票で逆転されました」

「どんなこと？」

「『ビデオニュース・ドットコム』というネット番組だったんですけど、そこまではキレよく立憲主義を謳い上げていた村上氏、なんとなく言葉を濁しながらつまりは『石破さんは一回自民党を出た人だ』と」

「しかも自民が野党に転落した時に出て、小沢新進党を経由して帰ってきたわけだから、まあ自民プロパーの人にとっちゃ『なんだよ』だわよね」

「そうなんですよ。でもそれってすごくよくわかる、腑に落ちる理由じゃないですか？」

「ええ。そう言われちゃ頷くしかないわね」

「安全保障政策がどうか、顔つきが悪すぎるとか、あるいは逆に安倍には岸の孫・プリンスの息子として党内の力が断然あるとか、そういうんじゃないんです。いやあるかもしれないけど。非常に人間臭い、感情の話なんですネ。

もひとつそれに類する話なんですが、とある会社が歴史ある大ブランドを畳みまして」

「レディボーデン？」

「いやいや、あれは外国の会社が現地合弁相手、この場合は明治乳業ですが、の努力と経験を甘く見積もったケースで、ダイムラーとヤナセとか枚挙に暇がないんですが、そういう理由じゃなくて普通に止めたんです。ブランド価値は非常に高くて、確かにその社としてブランド統合の最中ではあつたんですけど、なにもそんな急いで止めてええだろう、とその業界に詳しい人々はその決断に小首を傾げたんです」

「ふむ、その理由は？」

「前もって私は出生によつて差別はしません、と但し書きをしてあえてその時上級社員から聞いた言葉そのままお伝えしますと、新しい社長が創業者一族の妾腹なんですよ」

「あー」

「『あー』言いますよね。ストーン！腑に落ちますよね」

「落ちるわ。それは落ちる」

「で『こういうこと』って、とても全国紙や経済専門誌に書けない」

「書けないわねー。いまここで書いてるのだって結構ギリギリよ」

「しかしコア関係者の多くは『こうかな』と思ってる、そしてそれがおそらく正解」

「まあご本人もそうした感情だけで駆動されたわけでもないでしょうけども」

「ええ。そこに相関関係を見ることが自体、グスイ物の見方だと言われれば反論できないんですけど。」

で、これもね、つまり『言葉』の使いにくさのひとつですね」

「使える言葉があつたり、ピッタリの言葉があつたとしても、あるコミュニティの外へ公式表明しにくい言葉ね」

「そうなんです。外と意思疎通に使えない言葉は、半ば存在していないとも言える。『言葉になつてないところ』に、真実がある」

「言葉、ロゴスだけでは世界は既述できないわ。ミュトス、物語が必要よ」

「言葉にできないところやしにくいところを拾う役こそ、物語や劇の出番なんですよね。それはよくわかります。でも脚本屋にしろ小説家にしろ、それを主に言葉で表現せねばならないというこの矛盾」

「そこがおもしろいんじゃない。矛盾あるところに冒険があるのよ」

「はい。」

それで憲法に話を戻しますと」

「はい」

「法律というのがまあいえば言葉、ロゴス、理屈、ルールではないですか。普段これに従って我々は暮らしている」

「そうね」

「でもそれらはたまに暴走することがある。すると束縛になり、抑圧になり、生活をスムーズにするはずの言葉によって我々は苦しむ」

「それもあるわね。しかもわりと頻繁に」

「そこで憲法ですよ。法律の基準となる法律、法律を縛る法律。これに反する法律は成立させてはならない、作ったら捨てねばならない」

「言い換えると、間違った言葉が使われた時にそれを止めるものね。それは、何かしら？」

「それがなかなか言葉にできないんですけどねカッコ笑い」

「そりやそうよねカッコ笑い」

「いまのところ僕の言語能力では『勘』としか言えません。

『なんとなく気が進まない』とか、

『どう考えても理屈には合わないけどやってみたい』とか、人生ではたまにあることですが、そんな感じです」

「わたしはそれで『Stranger』を推すわ。

それって第三者から見えてどう見えるのか、一度チェックしてみるの。こないだ亡くなった任天堂の岩田社長がね、『仕事は得意なことをしなさい』と言ってるのよ。『好きなこと』じゃない」

「ああ、岩田さんもうどう考えても天才プログラマーなんだからいつまでも現場率いていた方がいい人なのに、いつのまにか経営者させられてましたね」

「得意不得意というのは社会への適合度なわけだから、それが合ってるほうが仕事には向いてるわよね。好き嫌いという尺度よりも」

「バブル崩壊以降、後者の物差しばかりが重宝されましたからねえ。その前が『得か損か』で決めすぎてワヤクチャになった反省ではあると思うんですけど」

「もちろん覚悟があれば好き嫌いでもいいんだけど、まあそういう物の見方もある、ということね」

「上手く行くと好きになつてきますしね、また。

ウチのちびねこだってそうです。いったん家族になつてしまつたら、もう他の猫は考えられないし、それを解消しようとは思わない。つまり好きになる」

「そうねえ。それやこれやまとめて運命ねえ」

「言葉と感覚は相反するものではなくて、法律と憲法のようにおたがいによく働くように補完し

あう関係というか。どっただけだと暴走したり、逆に細かい詰めができなくて上手く行かなかつたり」

「なにがあなたの憲法なのか、それはあなた次第、ね」

「そうですね、第三者でもいいし、直感でもいいし、阿弥陀様でもいい。僕自分自身への戒めとしては、

『言葉で全部描けると思うな』

かなあ」

「それは誰にとってもそうね、おそらく。言葉で説明できないことはいつでもものすごく多いので、闇雲に信用しすぎずに現場・現物・現実にあらず当たってみることだと思うわ」

「ええ。」

江口友子さんという平塚市議会議員の方が居て、彼女は癌を患って、手術の後、抗癌剤治療を続けていたんですね」

「うん」

「それが非常にキツくて、ある日『このままじゃ死ぬ』と思って抗癌剤を止め、食事と運動療法の西式健康法に切り替えられました。今も体調を見ながら市議の仕事がされています。

つまりこの話、現代医学で行けるところまで行けばいいんですが」

「対応できない領域のことは、頼りすぎるな」

「綺麗に表現すると『身体の声を聴く』『こころの声を聴く』。

血液系の癌なんかは抗癌剤よく効くそうですし、手術で助かる人もたくさんいるわけですし、なにもそれを否定しているわけではない話だと思うのですが」

「どうしても二項対立で思考してしまうものね。わかりやすいから」

「逆もあるんですよ。あるブログ覗いてましたら、かなりハードコアなマクロビオティックを実践してた人がある日『これじゃダメだ!』と絶叫して肉魚食いちぎる生活に」

「あらあら」

「それはいいんですけど『人間は本来穀物なんか食べるようにできてない』と白米を止め」

「ダメじゃん」

「信じる対象が天理教から真光教に変わったようなもので、その身を委ねすぎる、信じこんで入れ込む姿勢そのものが良くないのであつて」

「信じるというのとはかように誘惑的なものなのよ……楽だし、そもそもその『対応できない領域がある』と思いたくないのね人間」

「そこはなんでしよう、勇気の持ちよう?」

「生きるか死ぬか、みたいなのところをくぐると、『結局運命だなこれって』と思えるんだけど。むしろわれわれ古き神を信じなさい」

「来ましたセールストーク」

「昔からの神様なら信じ過ぎるなんてことないでしょ。バカなことばかりやってるし」

「そうですね、だいたい人間臭い神様ばかりですね。ゼウスしかり、大国主しかり」

「それを見て、自分自身に戻る」

「いやあ……まあ、そうですね、肩の力は抜けますね」

「でしょ？ 憲法もいいけど、マイ神様おすすめ」

「ああそれで言い忘れてました、くだんの江口さん、二〇一五年の選挙に出馬した時に、まさに馬と一緒に街を回ったんですよ」

「うま？」

「ええ。僕もほんの少しお供したんですけど、やはり馬がありますとみんなパーツと笑顔になりますね。笑顔までいなくても『お、なんだなんだ？』という、選挙中にはなかなか見られない表情に」

「選挙カーとか候補者とか近づいてくると目を合わせないようにしますもんね」

「ええ。その馬を使つたホースセラピーを全国で開いている寄田さんは『馬に頼つて生きる』とまでおっしゃる。ああ、そう、だからあの時は馬が神様でした。馬の様子を見てスケジュールや移動を組み立てるので、それが結果として、候補者にも無理はさせない」

「強力な第三者ね」

「ちよつと待つて、わたしたち馬みたいなもの？」

「あはは、『おおいなる者』なんだからいいじゃないですか。

まあとにかくそういう存在を心の中に持つていると、暴走ストッパーになって、最悪の事態には陥らなくて済むかもしれません」

「そ。死ななきやまたいいこともあるわよ」

「ホントそうですよ。宝くじって落ちてるんですよ。あれ買うんじゃないんですよ。

昨今は日常が『いいこと』で埋まってないとしあわせじゃないような強迫観念がありますが、なにもない、それもまたしあわせのひとつ。生きている、それだけでしあわせです。

うちのメツちゃんを御覧なさい」

「むしろ生きているだけでしあわせを感じられなくなったら、生物としてちょっとマズイことになっていくわね。生活いろいろ見直した方がいい」

「その時は大いなる第三者に見てもらった方がいいですね」

「すぐ駆けつけるわ」

「おねがいます。」

みなさん、マイ神様にバステト様もよろしく」

「お安くしておくわよ」

「お金取るんですか」

「あつたりまえじゃないコスト払うから人は真剣になるの。違法ダウンロードした動画とかマン

ガとか読まないでしょう？」

「いやそれは観たいから落とす人がほとんどじゃないかな……ちなみに阿弥陀如来ですと『なまんだぶ』の五文字詠唱で即救済発動ですよ」

「えっ、そうなの？ 『銀のスプーン・三ツ星グルメ』を神棚に捧げたりは？」

「要らないんですよ。より正確に言うとその前から救われてるんですけど救いを被救済者が認識するのがその瞬間。いまはサービスそこまで来てますよ。インターネット時代ですから。時間とコスト掛かったらAmazonに負ける」

「日本人贅沢すぎよ……」

「グローバル・ワールドですからうかうかしてるとAmazon来ますよ」

「イヤァッ！」

えっ、待つてそれ逆に言うと、わたしもこのマーケットにねじ込めるってことよね」

「もちろん」

「がんばるわ。手始めに日本中の招き猫を黒く染めて見せる！」

「『県立地球防衛軍』の敵役みたいな野望ですね……クロネコなら日本中走ってますけどね」

「株買おうかしら」

「優良企業ですよ。」

でもまあ、こんなところですかね。バスケット様の目標も決まったところで」

「まずまず、まとまったわね」

「一時はどうなることかと。ラジオパーソナリティって凄いなあ」

「ふふ。」

ところで貴方の神様さ、アミちゃんもいいけど、どうわたしなんか？ 特別に祈っていいわよ。信じていいわよ」

「いやいや恐れ多い。僕芸術家じゃないですしねえ」

「わ、開き直った」

「いやホントに。こないだの夏樹さんの主治医の先生じゃないですけど、芸術家つまり『先生』と呼ばれる人たちは、『なんとかしてやろう』という強い魂を持つ人達のことですよ。ほかあバス様じゃねッスけど『アホは死ね』なんで」

「貴方モテないでしょ」

「はい？ あ、それはもう。モテ期なんてものはただの都市伝説ですよ」

「わかるわ……神様が『信じていいわよ』つつてんだから信じなさいよ」

「なんですか突然その釘宮キヤラみたいなツンデレ美少女。」

「……あ。ああ。そういうことですか」

「なにが『あ。ああ。』よ。ラブコメで朴念仁みたいなあの描いてるかと思ったら本人が一番朴念仁だわ」

「いや、『信じなさい』と明確に要求してくださらないとこちらとしては」

「乙女にそんなはしたないマネさせる気？」

「で、でもウチ浄土真宗なんでメインが阿弥陀様ですし、家とクルマはいつも大神神社ですし、氏神は地元神社の素盞鳴尊ですし、厄除けは我孫子観音ですし、商売は住吉大社ですし、縁結びは生田さん」

「肝心の文藝は誰が担当なの」

「……あ。」

「『あ。』じゃないわよ大丈夫あなた。しょーがないわね、こんなに頼りにならないんだから、わたしが見てあげるしかないわね！」

「またテンプレッソングだなー」

「いいこと、このラジオの番組名、来週から、

『ねこがみつ！』

だから！」

「えーっ、それはもうピークアウトしてるネーミングだなあ……えーっ、と、

『猫神様が憑いている』

ぐらいでどうでしょう？」

「んー、まあ、それでもいいけど」

「こー見えましても私ネーミングは得意なんですよ。最近雅号を考えたんですが、『犀角』。どういいかんじでしょ？」

「ああ、ブッダちゃんの『スッタニパータ』から『犀の角のようにただ独り歩め』ね」

「さすが。そうです。『貪欲と嫌悪と迷妄とを捨て、結び目を破り、命を失っても恐れることなく、犀の角のようにただ独り歩め』」

「ちよつとカッコよすぎない？」

「まあ号ですから理想追うぐらいで。昔から『漱石』『鷗外』『子規』みたいな号が欲しくて

」

「一応文学少年なのよね」

「もちろんですよ。これニーチェもお好みの文言ですよ。しかも！大坂の作文業の大先輩・井

原西鶴師匠と音が同じ！」

「はいはいはい。なんでもいいわ。じゃそれで。

「さあこれから日本をわたしの支配下に置くのよー！みんなたち、どんどん妄想を爆発させて、わたしを萌え美少女化してちょうだい！そしてグッズ売りまくってロイヤリティがガッポンガッポン！キティとかあんなに負けてたまるか！」

「強敵ですよ。仕事選びませんし」

「じゃフェリックス」

「同じぐらい強敵やないスカ。ネコはライバル多いレッドオーシャンやなあ……」

「勝つためならアノマロカリスの化身になることも厭わないわ」

「んーまあネコにしますか。つぶし効きそうですしね」

「つぶし効きそうなものが一番くだらないものなのよ。貴方大学受験の時に経済学部選んで痛い目遭ったんでしょう？」

「ホント最悪でした。木村草太さんの『キヨミズ准教授の法学入門』でも読んで法学があんなにプラグマティックなものを知ってたらやつてたかしんないし、そもそもなぜ俺は文学部で国文や仏文やロシア文学をやつとらんのか、今でもまるで不思議です」

「貴方以上に周りが不思議に思ってると思うわ」

「でもそのおかげで流行りのピケティ教授の話聞いても少しはわかるんで、まあいいんですけど」

「Just Distiny.

運命よね」

「運命としか言いようが……女神様はネコでいたいのかいたくないのかどっちですか」

「猫娘ぐらいのポジには速攻イケるわよね」

「彼女も大ブランドですよ！ 六八年の第一作から出てるから芸歴五〇年近いヴェテランです。五期に至っては完全な美少女ルックだし……いや息子が居るのに『娘』はどうだろう」

「五〇歳の処女と一五歳の経産婦、貴方はどっちを取るの」

「それはもうその人によるとしか。沢口靖子と田舎イオンでベビーカー押してるDQN黒ギャルでしよう？ 三歳児金髪に染めて襟足のぼして」

「なぜ後者を『金八先生』第一シリーズの杉田かおるに設定しないの」

「あ、それは悩みますね！ や、バツ様は五千歳の経産婦じゃないですか」

「口の減らない男ね。そうじゃないの。いい？ すべては心の問題なのよ。心を整えて、嫌われる勇気を持てば、道は開ける」

「ベストセラータイトル並べりやいってもんじゃないですよ」

「もしも猫神様が貴方のマネージャーだったら」

「それはいいですね」

「貴方の心の中に居るわたし、それこそが本当のわたし。

あなたのわたし。

あなたを導くわ、よりよい運命の待つ方向に。

だからそのわたしを……」

「「崇めよ……」」

「ということでお時間となりました。

キュートでヒップな猫神様の著作権許諾のお申込みは絶滅危惧種のFMラジオ局・スパンキー

801、ペイパー・レイディオ『ネバーエンディング・ホリ』

「『猫神様が憑いている』」

「『猫神様が憑いている』まで。お相手はわたくし、長い長い人生の夏休みを満喫中、ピンボールみたいで気が置けないカッコ誤用、ながたと!」

「讚えよー」

「エジプトからお越しの神秘の女神、時代はエコ、レゴ、そしてネコ。ラブとアートを守りに守って創世記、バステト様でした」

「ではまた来世!」

「えーっ」

「夏のジョークよ。」

ではまた、あなたの心が開かれた時に」

「オープン・マイ・ハート!」

「「ごきげんよう」」

## 【奥付】

『猫神様が憑いてる』

作者 ながたかずひる

発行日 2015.8.14

mail nagata@mti.biglobe.ne.jp

web <http://rakken.net/>

twitter KazuhisaNagata



**Cat Goddess possesses me**  
**Powered by Kazuhisa Nagata**